

始





特 233  
299

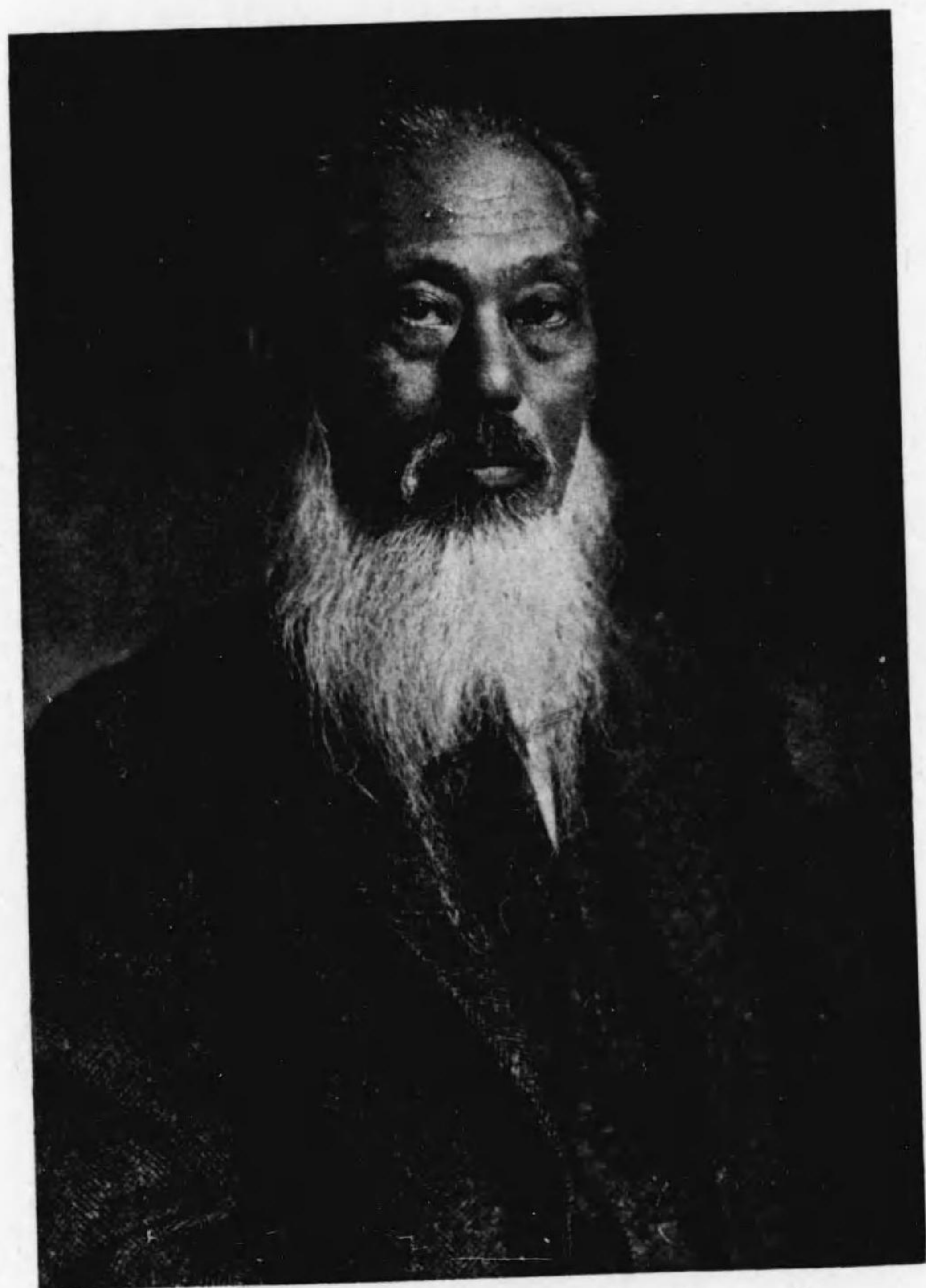
山崎延吉著

齊家の栞

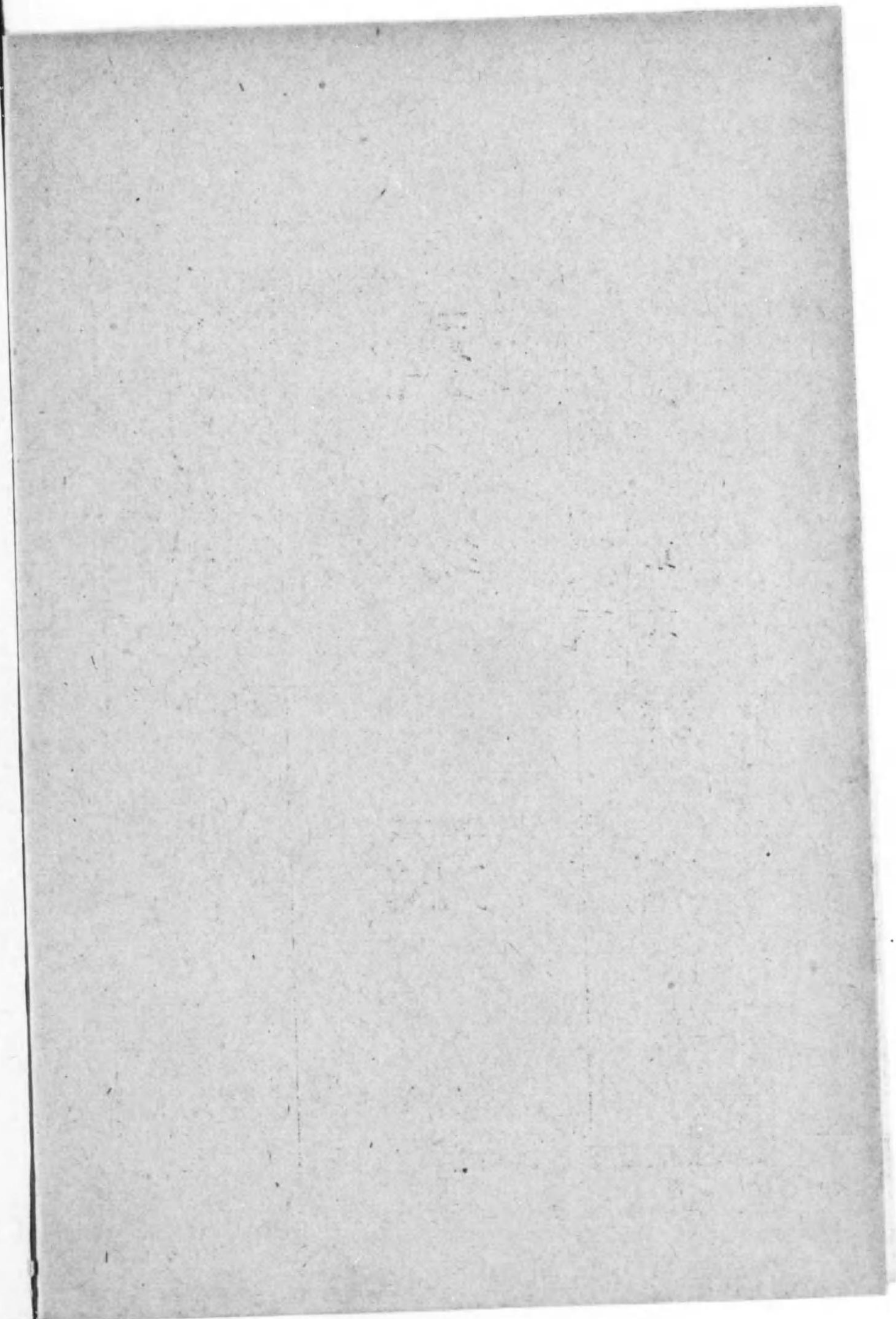
東京泰文館







者 著





はしがき

言葉は古いが、修身、齊家、治國、平天下は、世界の平和人類の幸福を招來する順序である。然るに修身の道に付ては小學校でも中等程度の學校でも教へて居る、又た治國の道は爲政家や政治家が職として之れに任じて居る。平天下に付ては國際間に研究されて居り、各國何れもそれを望むで其の實現に焦慮して居る。唯齊家の道だけは之を論ずるものなく、之を議するものなく、斯くすべしと則る所を説くものがない。家を尊重するは大和民族の國民性である。皇國固有のものである。而も何事も西洋に則ることをよい事とした以來、齊家は殆んど問題にならなくなつた嫌がある。然し大和民族はやはり大和民族であつて、家を尊重し、家系の連綿として續くことを希い、家庭が面白くあることを望み、家産の上に心配なきを祈つて居る。

僕の家系は源氏であり、遠き祖先は六孫王經基である。斯ることを言ふのを誇りと



し、斯る家系を有するが、皇國民の特徴であるとする。故に僕は敢て讀者の前に齊家の道に付て所見を述べ、御互に永久彌榮の家を持たんことを希望するものである。

本書は産業組合中央會に於て發行する組合員の家庭雜誌「家の光」の創刊號より滿三ヶ年間同誌に連載したものであるが、其後各地より是非單行本にせよ……との切なる御勤めのあつた爲不備の點を訂正及増補して上梓する事とした、幸ひに齊家の上は何等かの御參考にもならば筆者として無上の光榮である。

著者識す

齊家の栞 目次

はしがき

一、家系編

誇るべき家系……………二

父祖を辱しめない……………三

緊張した生活……………四

(一) 祖先崇敬……………六

型式を通して神明に通ず……………六

遙拜と禮拜……………八

忠孝の實習……………八



(二) 系統尊重……………10

家の寶物……………11

所謂舊家……………12

恐るべきもの……………14

(三) 結婚の肅正……………16

子孫と慈愛……………16

結婚と人種改良……………17

双方の理解が必要……………18

先入愛と後入愛……………19

親と同棲の幸福……………22

(四) 齊家の第一義……………23

我國の恥辱……………23

やがて天罰を……………23

大和民族と家系……………23

二、家庭編

家庭は社會の縮圖……………26

良い家庭は極樂淨土……………27

生存競争と家庭……………28

米國の排日紙が日本崇拜の動機……………29

罪人は家庭に包容さぬれ人から……………30

日本と英國の家庭……………31

(一) 家庭輯睦……………33

親子の間……………33



夫婦の間(妻に與ふる「勿レ」夫に與ふる「勿レ」)	三五
兄弟の間	四一
主僕の間	四三
例外の家庭	四四
家庭の輯睦	四八
(二) 躰(教育)	四九
全身大和魂	五一
家庭は教育の道場	五一
英國の紳士道	五三
家庭は子供本位	五七
(三) 家風	五八
家風の貴き事	五八

### 三、家 産 編

家風は人を化する	六〇
家族制度の長所	六一
齊家の基礎	六六
(一) 家業	七三
恒産あれば恒心あり	六八
汚い者の三福對	六八
僕の境遇	六九
齊家の一要素	七三
恒産に二種	七三
家業の意味	七三



婦人の仕事……………七四

農家の家業……………七五

農家収入の源泉……………七六

生産の三方面……………七七

商家に三代なし……………七七

農業經營の四本柱……………七九

農業經營の改善……………八〇

共同の力……………八二

働き損のないやうに……………八二

時勢と家業……………八三

(イ)家業の種類……………八四

一、自由と不自由……………八三

二、資本を要するものと要せざるもの……………八九

三、生産に従事するものと然らざるもの……………九四

四、無職は恥辱である……………九七

五、職業と公私の別……………九七

六、公に務むる人の心得……………九八

七、私の業にいそしむ人の心得……………九九

八、共存同榮の大義に目醒めよ……………一〇一

九、汗なき社會は墮落である……………一〇一

(ロ)家業と勤……………一〇三

職業を仇敵と見よ……………一〇五

家業と信念……………一〇六

職業の選擇……………一〇八



偉人と農業	110
家業經營の三勤	111
一、精勤 二、賢勤 三、耐勤	
(八)家業に對する心得	118
職業は利刀の如し	118
道中衣食あり	120
得んとせば先づ與へよ	123
(三)家政	124
戸主と主婦	125
男女と家政の担任	125
家政と婦人	126
農村の家庭と婦人	127

農家の裏面	129
齊家の上の悩み	140
生活改善(農村的結婚)	141
農家困憊の主因	143
農村的結婚の新レコード	145
嫁入道具	146
主義に生きる人達	151
家政の秘訣	154
一の罪惡	156
行ふに道あり	158
婦人の特性	160
婦人の新しい世界	161



時代の標語……………一六四

消費の説……………一六五

家政と三はれ(女房にほれ、業にほれ、土地にほれ)……………一六八

家政の意義……………一七五

家政の主……………一七七

家政の要道(其一、其二)……………一七九

婦人の教養……………一八四

家道は儉に在り……………一八六

我國の通弊……………一九〇

冗費節約の實例……………一九二

社會教育の一生面……………一九九

婦人と産業組合(一、信用組合、二、購買組合、三、販賣組合、四、

(三)

利用組合、五、組合の經營……………二〇七

家 産……………二一九

家 産……………二一九

今昔の相違……………二二一

實業と月給取の女房の相違……………二二三

僕の境遇……………二二三

家産の功德……………二二四

家産の源……………二二六

家産の種類……………二二〇

家産の造成……………二二三

家産の使途……………二三八

家産と相続……………二四九



家産と生活……………二五三  
 家産と災害……………二六〇  
 結 論……………二六六

餘 録

松本喜作氏農家論……………二七〇

齊 家 の 榮

山 崎 延 吉 著



家の觀念は西洋にはないと言つてもよい、彼處には住宅とか家庭とかの言葉はあるが、僕等が考へてゐる家を顯す言葉はないのである、我國の家は、家系と家庭と家産とを包含してゐるのであつて、其意味は深長である。

祖先の生命は家によつて傳はり祖先の血液は家によつて長久に流るゝのである。加之、休息所も、安息所も慰安所も家である、家産を維持し之を増殖するも、亦家である、故に我國では家は大切なものであり、尊重すべきものである。彌榮を理想とすべ



きものである。

◇誇るべき家系

家族制度は獨り我國に限つたものではないが、然し我國程洗鍊された家族制度を持つ國はないのである。今日學者の間には我家族制度に付て其缺點を指摘し、其弊を論ずるものがあるが、然し之れが爲めに我家族制度の長所を没却し其の美點を棄てることは出来ぬのである。其悪い所は何處までも矯正すべきであり、其缺點は之を改良するがよい。

我大和民族は誇り得るものを持つて居るが、就中萬世一系の皇統を主權とすることほど誇り得るものはないと信ずる。同時に我等國民の血統が比較的純であり、其家系が明瞭である點も亦誇るべきことである。

明治維新までは、我國の中堅は武士であつた、國民性を發揚する貴重の地位に居つたのも士族であつた。當時に於ては家系ほど大切なるものはなく、系圖ほど貴むたも

のもなく、系統ほど誇れたものもなかつたものである。たとへ財産がなくとも、零落はして居ても祖先は恥しめぬ心得があり、子孫を激勵するも家系であつた。故に系圖は家寶であり、系譜は唯一の裝飾でもあつた。

◇父祖を辱しめない

僕の父は、機會さへあれば、祖先の系圖を説き、其勇武の譽を話して、以て僕等兄弟を激勵したものである。實際僕は貧弱に育ち、頭も悪い男であつたが、今日稍社會に貢献し得る様になつたのは、家系を辱しめてはならぬとの奮發心に負ふ所が多いのである。今日では祖先の祭祀を怠らず、親の追善供養を怠らぬのも、家系を大切と思ふからである。

愛知縣の知事であつた、我國警察學の泰斗である、自他が許した法學博士松井茂氏は、自分の祖先が元寇の乱に勇名を馳せた河野道有である事を知つて、學生時代ではあつたが俄に緊張して、父祖を辱しめてはならぬと勉學し、今日の地位を得たと、



常に話をして居られ、僕も度々之れを聞かされて、其度毎に共鳴したものである。

◇緊張した生活

されば今日の人、家系に目醒め、祖先に對しては之を顯さんと努め子孫に對しては立派な祖先となるの心懸けがあるならば、今少し緊張した生活が出来ると信じる。

米國合衆國の人が、金が出来、思ふことが何んでも出来る様になると、家系を最後の要望とし、歐洲から家系の立派な人を求めて結婚すると云ふが、之れが向上性を有する人間の特徵ではあるまいかと思ふ。

昔佛のナポレオンが立身出世して、佛國皇帝となつた時、成り上り者と噂さるゝを氣にして、われに家系なしと雖も、われは子孫に對して誇るべき家系をつくるものなりと、意張つたと云ふことであるが、斯る事もあつたであらうと首肯することが出来る。同時に家系の正しからざるもの、家系の曖昧なるもの、家系のなき人々は、ナポレオンの意氣を以て終始する事が出来れば、もつと緊張した生活が出来、希望に充ち

た活動が出来、理想に生きることが出来ると思ふ。

僕は西洋流の利那的の生活を排斥するものであり、永延久遠の流である生命に悟らずして、短き人の一生をのみ貪らんとする現代の生活振りを忌避するものである。向上すべき人類の生活、文明文化を創造し得る特權を賦與された人間の生活は、今少し奥深く、今少し前後を考慮することが出来、人類を求遠に開拓し、彌榮の理想に生きることが出来ねばならぬとするものである。之れには、祖先祭社を絶さぬ様、子孫の持續を斷たぬ様、家系を傷つけぬ様に心得がなければならぬとする。

我國では何處にも産土神があり鎮守の社がある。それに多く祖先を祭つて居るのである。祖先の偉功を禮讚する手段になつて居る。又た家に在りては、祖先の祭り、命日に精進をする習慣があるのも等しく祖先を偲び、祖先を崇敬する手段であつて、共に家系を重んずる事に發端があるのである。



## 一、祖先崇敬

我民族の特徴は神を祭る事である、而も我國の神は吾等の祖先である。我民族は、人間の向上性を認め、人並以上の功績を上げた人、並通の人の出来ぬ事をやつた人を神と祭り上げる。それ故に祖先を崇敬するは、即ち神を祭る事である、神を祭る事によりて祖先を崇敬する意志が表示さるのである。

我民族間には、生命の久遠を信する思念がある、之れ故に吾等は祖先の生命の延長である事を知り、吾等の生命は子孫に流れ行くと思つて居る。皆信念によりて、吾等は即ち祖先と同一であるを稱へ、子孫も亦同一であると觀念する、故に自己の人格を尊重する以上祖先を崇敬し、子孫を愛せざるを得ぬのである。

### ◇型式を通じて神明に通ず

家の内に神棚を設けたり、佛壇を設けて、毎朝夕拜禮するは型式である。部落に鎮

守の社を造り、町村に神社を設け、春秋の祭事をなすも、亦型式である。石碑に向つて禮を述べ、墓に詣いて挨拶するは、形とのみ見るものには、奇態な風習と思はれよう。故に型式に囚はれ、外形にのみ制せらるゝものは、祭事や墓參を野蠻の遺禮なりとして排斥する。神社の前を通りても敬虔の念も起らず、寺の門前を過ぎて何の思念も起らぬ事になる。教育に恵まれたものに之れが多く、智識階級と云はるゝものに、斯る輩が多くあるは、蓋し我民風を辱かしむるものとする。

兄の衣服をかりて、別杯を上げた赤垣源藏は、衣服を見ないで、衣服を通じて兄を見たのである。神社に額くは、神社を通して吾祖先を見るのであり、佛を通じて己が遠き親を見るのである。子孫の繁榮と幸福とを祈願するは祖先の意念であり、遠き親の思念であるのである。誓つて精勵し、振つて努力せむ誠意を捧ぐるに、神人が一致する事であり、神明に通ずる事である。吾等が今日の安泰を思ひ、健康を喜ぶと同時に、其處に祖先の勤功と用意とを偲へば、感謝せずには居れなくなる。神を拜し、佛



に分掌するは、型式ではないのである。

#### ◇遙拜と禮拜

僕は何時も旅勝ちであり、従つて他人の家に泊り、多くは宿屋に泊る。其處には必ずしも神棚はなく、佛壇もない。それ故に、僕は臨機應變の措置をとつて、或は伊勢の大神に遙拜をしたり、床に向つて拍手の禮拜をする。汽車の中でもそれをやり、船の中でも之れをやる。

近來、到處に青年男女の講習會が開かれるが、行事の中には必ず遙拜がある。伊勢神宮に向つての遙拜、皇宮に向つての遙拜が、主であるが、それは誠に心持のよい事であり、結構な事である。故に短期ではあるが、學校教育に比して本當の日本國民が出来る傾のあるは、面白い事である。

#### ◇忠孝の實習

古人は、道は近きに在りと教へて居る。忠は必ずしも君の馬前に討死する事ではな

い、敵の矢玉にあたつて倒れる事でもない、吾等民族は同一の親から流れ出た血族であり、それが六千萬人であらうと、八千萬人であらうと、一億二億になるであらうとそれが結晶は天皇である。吾等民族は、身分職業、性や年齢が如何に相違して居つても、天皇に歸一するのである。それ故に同胞相愛の義に悟れば、天皇を愛せねばならぬ事になり、一にも天皇、二にも天皇、三にも天皇と、わが誠をさげねばならぬ事になる、それが忠であるのである。我國の主權でまします天皇は、國民の安泰を念願され、國家の平和を祈願されて、維れ日も足らざる御生活の方である。故に天皇に身心をさくるは、即ち民衆の犠牲になる事であつて、それが忠である。天皇の御意志は國は平らげく、民は安すかれとある、故に各自が己の職業、勤務を通して、天皇の御意志に副ひ奉るは、天皇の忠良なる臣民である。

遠き親を祭り、近き親を敬ふは、即ち孝である。誰れの親も子孫の出世を希ひ、繁昌を喜ぶものである。それ故に、身體髮膚を損傷せず、以て親に心配かけず、功をな



し名をなし、以て父母を顯はすは、子孫の孝道であるのである。親の子に對する愛は絶對であり、命がけである。それを思へば、父母は敬して安んずべきであり、祖先は祭りて顯はすべきである。

忠孝の實習場は家であり、家によりて我國體の精華である忠孝の道が實習さるゝのである。大なる哉、齊家の意義、偉なる哉、齊家の理由。わが國民は正に此事に自覺し、此業に勤むべきである。

## 二、系統尊重

わが天皇は神の正系であらせられ、現人神でまします。憲法に於ては、夫れ故に、「天皇は神聖にして犯すべからず」と制定してある。わが國民の多くは、八百萬の神々の子孫か、然らざれば皇室の傍系である。支那の歸化人もあり、朝鮮からのそれもあり、西洋からのそれもあるが、多くは神代ながらの血統を有つものである。

世界は廣く、萬國は多しと雖も、わが國民ほど、正しき清き血統を有するはなく、久遠にして正確なる家系を維持するもない。わが國家の誇りはそれであり、わが國民の誇りもこれである。系統丈けは金を以て購ふ事も出來ず、權威を以ても求むる事の出來ぬものである。其處に系統尊重の理由もあり、意義もあるとする。

### ◇家の寶物

當年の武士は、家系を以て唯一の名譽とした。或は源氏、或は平氏、或は藤原氏、或は橘氏、其祖先の偉いものである事に誇りを持つて居つた。故に家寶は系圖であつた。火事の如き災害のある場合は、何物を置いても系圖を持ち出す心得があつたものであり、其心得がなければならなかつたのである。

僕の家でも、系圖は何時も天井に吊してあつた。父は非常時に之れを持ち出せと教たものである。同時に、常に祖先の勤功を説いて子孫を激勵した。飯を食ふ時、茶飲み話にも、祖先の話が出、祖先を辱しめてはならぬと繰りかへし、血統を汚すなど戒



しめられたものである。

如斯は、獨り武家の風習でなく、國民一般の風習であつた事と信ずる。如斯して、わが民族は繁榮しつゝ、其偉大さを加へたものとする。

◇所謂舊家

わが國には、到處に舊家といふがあり、家格が認められて居るものがある。斯る家では何處でも、祖先を崇敬して居り、中には祖先の手の跡を保存したり、遺物を蒐集してゐるもあるが、稀には家の歴史を作つて居るもある。

土地に親しみ、生命の生産に従事する農家に舊家の多いのは、わが國民が考慮すべき事であり、系統尊重上深甚の反省を要する事とする。諺に商家に三代なしとあるがそれが事實であり、事例あるを如何にせむやである。元來、商工の民は價值と効用との生産を營むもので、生命を生産するものではない。故に商業は大切なりと雖も、工業は重要なも、生命はない。これ商工の民に舊家なく、市民に永遠の血統を見る能

はざる所以である。

わが國近時の不祥事は、所謂舊家の凋落する事であり、滅亡する事である。之れ多くは農を去つて都市の業務に轉んじ、甚だしきはじみの業務を避けて射伴に驅せる所以であるとする。

職業に貴賤の別はなく、如何なる勤務も神聖であるが、然し生命を永遠に伴ひ、家が連綿として存續し、彌榮の國家の理想に適ふは、生命より生命を生産する農業にこそしむに限る。わが神代ながらの皇室が農業を直營する所以、又たわが國家が永く國體を鼓吹せし理由は、其處に存するのである。

米國の建設者ジョージ、ワシントン氏が大統領をやめて後、一生は農業にさゝげ、自己の體驗からして、あらゆる職業の中で、最も貴く最も大切に於て且つ趣味あるは農業なり、と教へたのも、近き將來に於て印度を獨立せしめむ運動をやつて居るカレー氏が、あらゆる職業の中で人類に幸福を與ふるものは農業あるのみと教へて居る



のも、わが建國當時の用意とかはらぬのである。

國家は永遠の生命を持つべきものであり、國民も亦永遠の彌榮を理想とすべきである以上、生命ある職業に従事する事を慫慂するは當然の事である。僕は敢て職業に貴賤の別を立つるものではないが、永遠の生命を得、家系の連綿として亡びざるを欲する上よりして尊農の説を述べざるを得ぬのである。

◇恐るべきもの

家系は正しかるべく、清かるべく、以て永遠の生命を有たねばならぬものである。而も家系の神聖を毒し、永遠の誇りを傷付けるものがある。恐れて戒しむべきであり知つて用意を周到にすべきである。

不治の病を得るは不可抗力の場合もあるが豫防の出来ぬものではない、不純の血液を混するも用意を以て防止し得る事である。不治の病は家系を斷絶するものであり、不純の血は血統を濁すものである。共に恐るべきものであり、惡むべきものである。

最も警戒すべきは肺病と癩病と花柳病とである、之等の病は攝生と、守操と、用意とを以て確に豫防の出来るものである。不純の血を防ぎ、恐るべき遺傳を移す事も、亦結婚を肅正する事によりて出来るものである。それには家系に對する嚴肅なる意識がなければならず、系統尊重に對して眞執なる自覺がなければならぬとする。

わが國には肺病が多い、それは肺病に關して無頓者なるが爲めである。病氣の恐るべきを知つて、而もそれは無頓者なる事の如何に恐るべきかを知らぬ。花柳病も亦多い、其恥しさを知つて居るが、童貞を破る事の恥しさを知らぬ。遺傳學の進むで來た今日は遺傳の恐るべきを知つて、之に對する用意の足らざる事の恐るべきを知らぬ。醫術は進み、滋養は殖へ、取締法も出來、學問上の智識も開らけて來たか、自修、自制、自守、自治が出來ぬために、恐るべき禍難は多くの國民を惱しつゝあるが、今日の現狀ではあるまいか。

之れ、家業を重んずるの意義を辯へず、系統を貴ぶ理由を解せざるに基因するが多



いとす。二千五百八十八年の彌榮を實現したわが國民は、正に相戒しめて自覺せねばならぬ、と敢て勸告する。

### 三、結婚の肅正

#### ◇子孫と慈愛

又た我國ほど子孫を慈愛する國もない、西洋人は日本は子供の天國なりと云つて居るが、之れ程に子供を可愛がる。之れは、陛下の赤子なりと思ふでもあらうが、たとひ無意識でも子供は自分の生命と血統の延長なりと思ふからである、之亦家系を貴んでのことである。斯くして家系の保存が出来るのである。

特に我國での特徴と目すべきは結婚法が家系本位であることである。戀愛至上論者は、我國の結婚法を呪咀し、之を古い仕方であると罵つて居るが、如斯きは向上と進化とが人の特權であることを知らぬものであると、僕は斷言して憚らぬものである。

#### ◇結婚と人種の改良

之れには、世界の大問題である人類の退化と其善後策に付て少しく述べる必要がある。世界の大勢は、低能の人、神經衰弱の人、氣の狂ふ人、不具者、不妊娠の人、犯罪者病人の殖えることである。孰れの國でも其始末に苦むで居り其豫防策に苦しむで居る。大切な資本も之れが爲めに費され、貴い人の智腦も之れが爲めに消耗され高い人の勞力も之れが爲めに消費される。それ故に起るべき生産事業も起らず、進んだ社會施設も出來ず、やりたい事もやれぬで済むことになる。此れ程人類の不幸はない。此れ程國家の禍もないのである。今や各國の目醒めた人達は其處に氣が付いた。氣が付いて調査をすれば、なる程人類退化の事實は顯著であり、其進行は奈邊に及ぶかも不測の憂である。世界の思潮が悪化し左傾するのも、文明國同士が悲慘なる大戦争を敢行せしも皆それがためと思推される。其處で前年合衆國で、學者、保險業者、統計學者、裁判官、教育家、醫師等の専門家が寄合つて、其善後策を講じたことがある。遺傳進



化學の進んだ今日、品種改良を他の生物に試みつゝある今日、獨り人種の改良にのみ苦しむ道理はないのである。そこで、研究討議の結果は、

一、從來の結婚法を改めて血統本位とすること。

二、育児に遺憾なきを期し兩親と同棲すること。

を敢行すべしとした。吾輩は、それを見て、何んだそれは我國固有のやり方でないかと思つた。同時にそれが向上性の人類、進化の人間に對し當然の仕方であると、愈々僕の信念を強うした。

◇双方の理解が必要

我國從來の結婚法は、當人の愛の有無よりも双方の血統性格を重んじ、家系の正しきを選ぶを唯一の條件とした。血統がなく、當人の性格が立派であり、家系の正しければ、然る後双方の見合をやつて双方貰ふ、往かうと定まれば、それで結婚が出来、階老同穴の契も出来るのである。それは盛にやつて居る動物や植物の品種改良法と同

様の理論に基づいて居る。

戀愛至上論者は、双方の愛を主とし、理解なき双方を結婚せしむるは罪惡なりと云つて居るが、血統も解らず、性格も吟味せず、家系も論せずして、ほれた、ほれたと云つて結婚する事が人類退化を助成する事であつて、之れが人類に及ぼす大罪である事も知らぬは情ない事の極みである。云ふまでもなく、双方の理解は大切である。嫌ふ男をとれとか、惡む女と一所になれと強要し、強制するは悪い事である。然し双方の研究をし、詮議をなし、然る後見合をやつて確實なりと云ふので、結婚するが何が悪い。

◇先入愛と後入愛

抑も愛には先入愛と後入愛とがある、西洋人は先入愛を主とするのであり、日本人は後入愛に生きるのである。先入愛の永續せぬ事は、西洋人の家族が経験して居る所であり、近頃自由結婚をやつた我同胞も辛い經驗をして居る筈である。西洋人の風紀は既



婚者によりて亂さるゝ事は、少しく廣い知識を有するものゝ周知の事である。然るに後入愛は結婚後の愛であるから深酷であるだけそれだけ永續する、我國に於て除外例はあるが、多くは不品行も結婚によりて矯正され、夫婦の愛はそれこそ偕老同穴である。現に僕等はこれに貴い體驗をして居り、温かい家庭をも組織してゐるのである。

我國固有の結婚法を以て愛なき結婚とする者は、所謂たての半面を見て、其全面を見る能はざるものとする。然らざれば戀して見ればアパタも笑窪に見ゆるの類であつて、戀愛の奴隷者であるとする。如斯は、常人も之を恥とし、君子は與みする事を惡むものである。世に自由結婚を理想とし、戀愛至上に囚はれた事を新人と云うて居るが、之れは人類の幸福を思はぬ利己の沙汰であるとする。新らしい學理も辨へず、進むだ學術も認めぬ、それこそ原始時代の人でもあるとする。

新人は皆夫婦で一家を組織し、年寄りや兩親と同棲を忌むが常である。愛の快樂を壇にするには便利であらう、性慾を存分にするには都合がよからう。然し妊娠に經驗

なき夫婦、育児に試練を缺ける夫婦は、往々にして不注意、不用意、獨斷の結果、可愛子供を其犠牲にする。それが今は、流をなし風をなして居るのである。故に子供が可愛ければ、子供を完全に健康に育てたいならば、經驗に富める老人や兩親と同棲するが賢明である。それが親となつた人の子供に對する義務を果たす道でもあり、世界の人類に對する責任を盡くす所以の道でもあるとする。

#### ◇親と同棲の幸福

親と同棲して居れば、當人同志の我儘を矯正する事も出来るし、又た夫婦間の阻隔を豫防する事も出来、其處に本當の人間味を嘗める事が出来るものである。故に僕は出来る事なら老人と同棲をすゝめ、兩親と同棲が出来る事を幸なりとする。此意味に於て實業者は、官吏や軍人や教育者と同日の論議を許さぬ程幸福な人であるとする。實際、牧師や官吏や軍人や教育者の子供は才子であり、賢者であり、人格者であらねばならぬ道理であるが、さうでないが面白いではないか。



兎に角、家庭を維持し、正しき家庭を作るには、結婚が尤も大切な事であり、其方法が尤も注意を要する事であり、子供をよくするのは、結婚後の生活が至大の影響を及ぼすものである事を、よく辨へねばならぬとする。

#### 四、齊家の第一義

##### ◇我國の恥辱

男は童貞を守り、女は貞操を持すべきは、獨り道徳上に於て然かるべしと云ふばかりでなく、家庭を正ふる上に於て是非然かあるべしとする。僕は醫者でないから事實は知らぬが、我國の恥辱は死亡率の高いことである。之れは當歳より五歳位までの子供の死亡率が馬鹿に高い事が原因であり、之の死因は腦膜炎になつて倒れるが多いと云ひ、其の由つて来る所以は兩親の梅毒や淋病によるといふのである。して見ると我國では、親の報いが子に來る現象が多く、之れ丈け男か女か、或は双方の節操が傷

つけられてゐる事が多いと認むる事が出来る。

##### ◇やがて天罰を

氣の毒であり、悲むべきであり可愛相であるが、死亡する者はまだよい。或は低能兒となりて生存し、或は狂氣の人となつて生き残り、或は疾病に苦しむで一生を終はるものを生じては、全く家庭を汚がし、血統を乱だす事になる。祖先に對して不忠となり、子孫に對して不慈となり、全く後悔しても拭ふ事の出來ぬ罪惡を犯かす事になるから、男女の節操はど嚴肅であらねばならぬ事はないとする、近時自由結婚を讚美する徒が、或は戀愛の三角同盟を作つたり、四角同盟をやつて平氣であり、世間も亦面白がつて之に制裁を加へんとせざるは、僕は我國士氣の敗類であるとする。然し彼等はやがて天罰を受けて、子孫の爲めに苦しむか、或は子孫斷絶を見るであらうとする。

##### ◇大和民族と家系

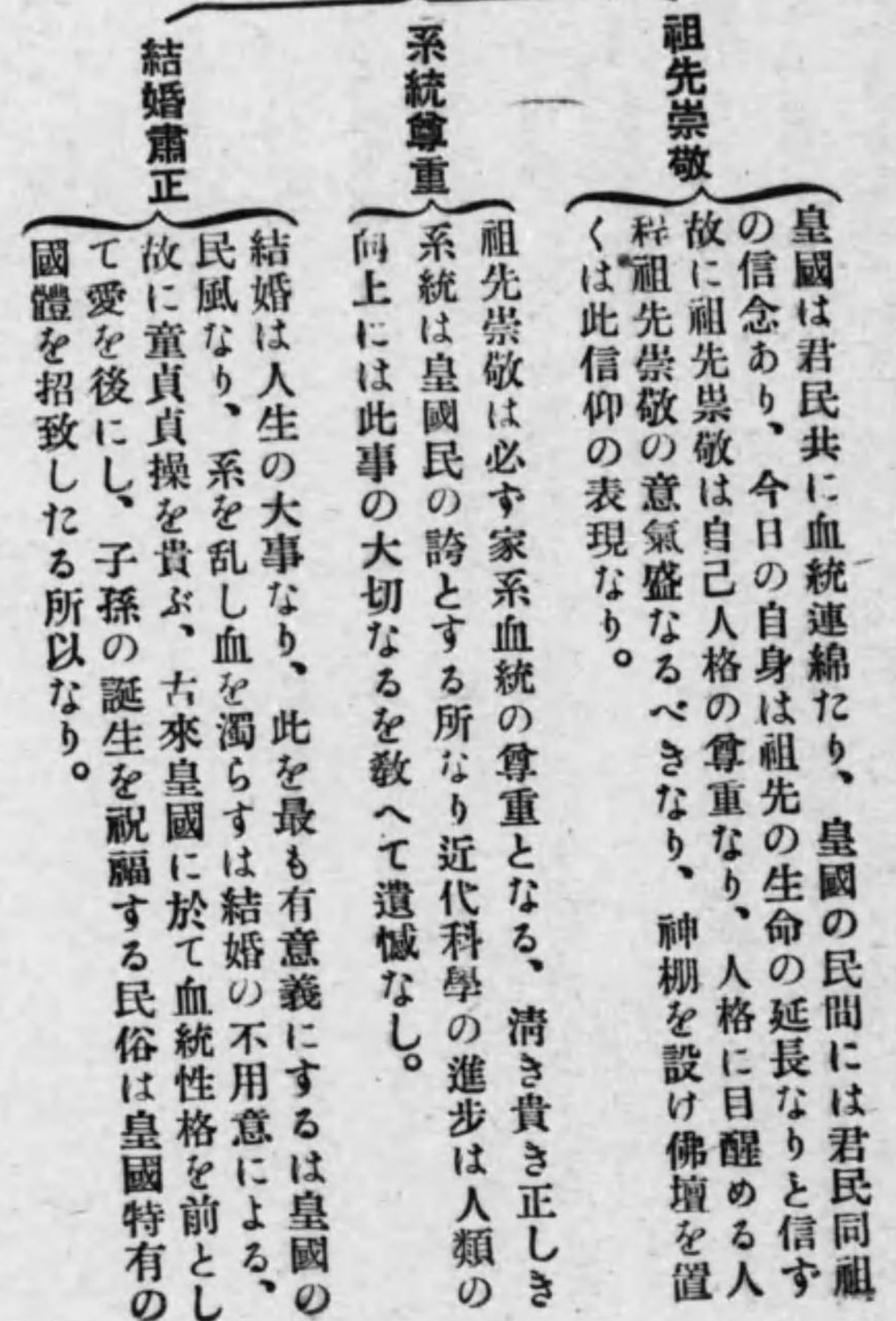


繰り返して云ふ、家は家系に因つて出来、家系を維持し、家系を作る所であつて、我國でそれが爲めに、家を尊重するのであり、尊重すべきである。恐れ多い事であるが、萬世一系は單に我皇室ばかりでなく、臣民であり國民である我等の家系も左様であり、左様でなければならぬ所に、我大和民族の誇りがありとする。之れ故に、我大和氏族は、建國の當初よりして、皇國の將來を理想とし、子孫繁盛を念願するの習慣を持つて居り、家庭を重んじ、血統を貴ぶに於て、他に比類なき報公があるのである。

故に大和民族の特徴とし、日本國民の面目として、齊家上家系を尊重し、之を維持し、之を向上する事に努力し、工夫し、注意する事が大切であるとする。齊家の第一義は家系を亂さぬ事であり、之を作る事であり、之をよくする事であつて、之れが爲めには、己が來所を知つて祖先の祭祀を怠らず、其往所を辨へて子孫の繁昌に努力し之れが爲めには結婚を慎重に考へねばならぬと同時に、男女共に守操が大切であり、

一夫一婦の原則に生きる事の必要を認めねばならぬとする。

### 家——家系





## 二 家庭 編

### ◇家庭は社會の縮圖

家庭は何人も認むる所であり、組織する所であつて、さうして之れは家の時代相であり、現實である。人は家庭に育つが順序であり正常なのであり、かうならねばならぬものである。故に家庭を有せぬ人は不幸であり、家庭を持つ事の出来ぬも亦感むべきである。されば人の理想として、家庭を有つが萬國共通の人情であり、よき家庭を有するを念願するは、世界共通の人心である。

家庭は人間の搖籃であり、教場であり、道場であり、安息所であり、娯樂場であり産室であり、往生の場所でもある。されば家庭は社會の縮圖であつて、社會の出来事は家庭に於て見ることが出来る。家庭の有様を見て以て、社會の全體を窺う事も出来るのである。家庭を離れて社會なく、社會を離れて家庭は存在せぬのである。此事は

國家に適用し得る、國家との關係に於ても同様である。

善良なる社會を見んと欲せば、先づ自己の家庭を善良にする必要があり、堅實なる國家を組織せんには、必ず自己の家庭を堅實にせねばならぬのである。家庭の乱れたる所に頹敗の社會が出来、紊亂の國家が出来。今日或は上流社會の腐敗を論議する者がある。之は上流社會の家庭紊亂が因をなすものである。四五の人が共同生活をなす所が家庭と考へれば小さい話になるが、それが社會と國家とを創造すると思へば大きい問題であることに誰れも氣がつくであらう。

### ◇良い家庭は極樂淨土

由來我國は家庭に深き注意を拂つたものであり、注意深くあらねばならぬ様に國情が嚴肅であつた。それが歐化し、米化するにつれて、習慣を喜ばずなり、古き風俗を好まずなり徒らに新らしきを貴むだ結果、今日は家庭に深き注意を拂ふの風習は地を拂うて空しからん勢を來したのは、現代社會の混亂を見ても解るのである。



見るに見かね、聞くに堪へぬことが重なり来りては何人も現状打破を思はず居れなくなり、改造を敢てせねばならぬことになり、今や甲乙駁して世の中が騒しくなつて来たのは、結構な現象と見るの輩はあるまいとする。

全くよい家庭に入つては居心持がよい、何んとなく落付て来る。不幸にして紊れた家庭に入つて見ると、自ら居悪くなり、不愉快を覚え、遂に二度と行くまいと思ふ様になる。故によい家庭は、此の世からの殿堂であり、淨土であり、天國であり、極樂でもあるとする。

#### ◇生存競争と家庭

生存競争が激しくなればなる程、人はあまり、いらだち、急ぐことになる。其結果は神経が衰弱し、果ては神経病となり、狂氣になる。故に今日の如き生存競争が激しくなつては、よい家庭を有つ者が最後の勝者となる。さればよい家庭を有つた人は幸福であり、極樂の境遇に置かれたものと云へる。而も家庭の善悪は、家庭の人の

心掛け次第であつて、他の干渉することでない。左様することが出来ぬものであればわれ人共に此處に悟る所がなければならぬとする。

特に我國は家族制度の國であつて、歐米の諸國と聊か異なる所がある。二千五百八十餘年の國體を有する國民であれば、自ら違つた國民性もある。故にわれ等は制度を考慮し、國民性に遵據する覺悟がなくなれば、我國固有の家庭生活を味ふことは出来ないと信ずる。

#### ◇米國の排日紙が日本崇拜の動機

嘗て、米國で排日運動を盛にやつた當時、桑港で發行して居たクロニクル紙は、尤も猛烈なる排日記事を掲げたものである。それが如何なる動機か、わが國を視察する爲め記者を派遣した。其結果は意外にも、吾等は長く日本を誤解して居つた、日本は全く偉い國である。よい國である、日本國民は敬すべきも排すべき國でない、と書き立てる事になつた。其新聞は當時日本にも配布された故に見た人もあらう、讀むだ



方もあらうと信するが、何の點に感心したか如何なることに好感を有つたのかと云へば、是れは色々であるが、先づ我國に三千年一貫した忠君愛國の精神が今も尙活躍してゐることに敬虔の念を拂つたのと、家庭が國家本位であり、國民精神が家庭で養成されてゐることに敬服したことが尤も著しかつた様である。全く國民精神、換言すれば皇國精神は、昔も今も家庭に於て養はるるのであり、さうなければならぬのである。三千年を貫いて尙且つ生きつゝある忠君愛國の精神は、學校より寧ろ家庭で養成されつゝありとするが、何人も首肯する所であらうとする。

◇罪人は家庭に包容されぬ人から

唯だ今日は、事の繁くなるにつれ、業の忙しくなるに従ひ、人が多くなりて淘汰作用が激しくなるまゝに、家庭を思ふ暇なく、顧みる時のなきは、尙可なりとするも、家庭を有ち得ぬ人、家庭を組織し得ぬ人、家庭の中に包容されぬ人が、年を追うて殖えつゝあるは蓋ふべからざる現代の出來事であつて、誠に情ないことの限りなりとする。

る。

自暴自棄に陥る者も家庭のない人に多い、輕佻危激の徒も家庭を組織することの出來ぬ人から出來、浮華放縱に走る者亦家庭の人にあらざる者に發出するは、調査研究を要せぬことである。特に家庭があつて之をよくする能はず、家庭の人にして之を呪咀したり、家庭を退去せねばならぬ者も多いことは、全く困つたことである。

それを思ひ、之を考へば、齊家を論するに當り、特に家庭に就て注意を促し、家庭をよくする上に付ての意見を述ぶるは、敢て無駄事でないと思ふものである。

◇日本と英國の家庭

家庭に付て比較的嚴肅に考へてゐる國家は、西に於ては英國、東に於ては我國であらうと思ふ。英國人の諺に「家庭は城廓の如し」といふがあり、家庭を神聖にして犯すべからざる者の如くに思つて居る。之れ故に英國では案内されざる限り、許可なき限り、食事時間に家庭を訪問するは非禮なりとして居る。少くも食事の時の家庭團らん



の楽しい場所を作り、家族一同が心からの語り合ひをすることにし、さうするが當然なりとして居る。

我國では英國ほどに訪問に制限はない。制限し様ともしない。然し今日は多忙の世になつた爲め、食事時には御互は遠慮する様になつて來たが、然し家庭本位に種々の會合は考へられぬ。それに夫婦同伴の習慣がまだ幼稚であるが故に動もすれば男子は特に出勝ちで婦人の留守が多くなることになる。然し家庭に付て考慮し、注意し、之をよくする思念に付ては英國人に優るも劣つては居らぬとする。彼が鎖國的であれば是は開國的であり、英が外觀的でありとすれば日は内觀的であるとする。其處に多少の相違はあるか、家庭を思ふ國が、等しく世界の東西に存在を認めらるゝは面白いことであるとする。

日本は家の觀念に於て他の國民と違つて居り、家系を重んずることが特徴である丈、家庭に於ける注意にも相違がある。勿論我國の家庭にも種々の點があり、従つて

改善をすべき餘地も澤山あるは、御互に心得べきことであつて、同時に努力を吝むべきではないとする。

### 一、家庭輯睦

何人も心持よく感ずるは家族團樂の家庭である、親子、夫婦、兄弟、姉妹、主僕が一心同體である家庭である。所謂春風の吹けるが如き、何處となく暖味を覺ゆる家庭は、即ち團樂輯睦の家庭である。

家族制度の國、特に家長戸主の權威の大なる、權利の強き我國に於ては、一家の家長たる戸主の心得が尤も大切であり、之を援助する主婦の覺悟が大事である。試みに家族の心得を概括せんか、統一、分擔、理解の躍動によりて家族の輯睦が出來、團樂を見ることが出來るとする。

### ◇親子の間



は同じ生命の流れであり、同じ血の通へるものである以上、親は子を見るに、己の生命の延長と悟り子は己が生命の來所と親を解し、相互の人格を認むることが出来ねばならぬ、親の愛に因りて育てられし子は、愛の功德を知りて之に報ゆるの道を踐み子の勤勉によりて安心を得たる親は、子に謝まることが出来ねばならぬ。己を愛するは親を愛し子を愛すると等しからねばならぬ。親子は本來一であつて二には非らず、二と見るは形であつて、同一の生命の流れであるを悟らねばならぬ。故に身體髮膚之を父母に享け取て之を毀傷せざるは孝の始めで、名を揚げ父母を顯はするは孝の終りと説かれてある。

親子の愛ほど神聖にして犯すべからざるものなく、又永久かはらぬものもない。全く親は子の爲めに犠牲の生活をすることも辭せず、犠牲となるを敢てすることもある之れは教へられて然るにもあらず、強制されて然るにもあらず、全く自然である。其處に親の貴さがあり、難有さがあり、權威もある。子を持ちて知る親の恩とは、よく

之を教ゆる自然の理法を説いたものと思ふ。

之れ故に子を粗末にする親は己を粗末にするものであり、子を愛する能はざる親は己を愛する能はざるものである。子を尊ばざる親は己を馬鹿にするものである。汝に出づるものは汝にかへる、とは此處にも適用すべきことであるとする。

道理を辨へ、理法を知り、實例に鑑みて、親子睦く暮らし、親子は水入らず生活をなし、親子共同援け合へば、何處に於ても春風鬢鬢の家庭が出来、何時でも暖かき人情味に快き團樂を見る。

世は開らけ、人智進むで、親は子に澁ぐ愛を割いたり、子は親に捧ぐべき愛を他に移して、平氣であり、それを新らしがつて居るもある。理論は兎にあれ、斯る人々は早晚家庭に惱まざる、羽目に陥り、不幸な境界を味ふべきであるとする。

◇夫 婦 の 間

は理解が第一であり、一心同體の悟りが開らけねばならぬものであり、愛の輝きで





何時も明るい心持がせねばならぬものである。

我國の風習は血統を大事とし、遺傳を穿議することを先にする結婚であるが故に、多くの人は戀愛結婚ではない。然し後入愛で、階老同穴の契りは幾久敷かはらぬものがある。今日表裏少き世の中であれば、夫婦互に人格を認めて居れば、男尊女卑とさげしむ必要もない、従つて斯る形式は年を追うて消滅する筈である。たゞ多くの家庭に於ては、男子が主として生活費の調達に任するが故に、或は意張つたり、權威振つたり、えらさうに構へるもある。然し斯る夫も妻君の意見にはよく聞き、その希望には従順であり、時には妻君の氣嫌をとるもある。

制度の上よりせば、戸主は一家の責任者であり、家族の扶養に責任を持つて居るのみならず、家族を向上せしめねばならぬ責任もあるが故に其代償として相當の權利を持つは當然、従つて強いも亦當然なりとする。夫の責任を分擔し、夫をしてよく責任を果たしむる援助をなし、鞭撻を有し、後顧の憂なかしむる妻は、全く良妻であると

する。

國民皆兵の今日は、當年戦争に出陣して死亡せし夫を見たる妻女は、夫に代つて戰場に馳せる心得がなければならぬとする。男子のみが護國の任を負ふべきでない、女子も亦分擔するが、我國の女子の心得でなければならぬ。之れは必ずしも武器を持つて戦うのではない、軍艦に乗り込む意味でもない。男子をして快く奉公に盡くさしむることである。之れは兵事の上ばかりでなく、政事に於ても、教育の事に於ても、農事に於ても、凡ての事に於て同様であらねばならぬのである。

戸主に統一の力あり、戸主をして統一せしむる力が主婦に在り、各自の分擔を明かにして、其事務に責任を果たすことが出来、相互に理解がよく出来て、怨聲を聞かず怒聲を耳にせぬ家庭は、蓋し理想的のものであり、模範的でありとする。

何人も斯る家庭を望むで、之を實現するに苦しむで居り、誰れも斯る家庭を作らんと試みて、其容易ならざるに嘆きつゝあり、何處でも斯る家庭が出来さんと努めて前



途遠達の感あるは、全く夫婦の理解が出来ず、心得が双方に十分でない爲めとする。  
米國の紐育市に法律相談所があり、其處の顧問をしてるレオナード、マギー氏は十年の經驗に徴して、次の様な十ヶ條を夫婦の各に與へて居る。試に一年平均三萬五千の事件が同氏によりて處分され、其多數が夫婦間の問題であることから判断すればマギー氏の忠言は尊いものである。我國と米國とは勿論國俗か違ひ民風が異つて居るが參考として掲げる。

◇妻に與へる「勿れ」

- 一、贅澤をする勿れ。男は誰れでも經濟的に獨立したいと思つて居る。因つて彼が稼ぐ所の金銭が馬鹿らしいことに使用されると、彼はもう其金を出すことに興味を失つて了ふ。
- 二、家を不潔にする勿れ。清潔な家は疲れた心を新鮮化する。
- 三、他の男性からの注意を受け入る勿れ。夫は屢々嫉妬深く、時としては理由なしに

疑ふものである。

- 四、夫が合理的に子供を訓練することを怨む勿れ。
- 五、實家の母と共に餘り多くの時を費す勿れ。
- 六、身の廻はりを醜くする勿れ、だらしない妻は出歩く夫をつくる。
- 七、家庭内のことに付て、隣人や親類やの忠言を受ける勿れ。先づ自分で考へて見て自由に相談すべきである。
- 八、夫を誹る勿れ彼を力つけよ。
- 九、むつつりと、六ヶ敷い顔をしてゐる勿れ。ほゝ笑め。
- 十、「小さなこと」が大事であることを忘るゝ勿れ。何事にも如才なくやれ、女らしさを失ふな。

◇夫に與ふる「勿れ」

- 一、吝嗇である勿れ。妻は正當な扶助を期待する権利を持ちて居る。彼女の不幸に對



しては寛大で若し必要とあれば悦んで食ふや食はずの生活もやる。然し彼女は、「けち臭い」ことを嫌ふ。

- 二、妻の家政法に干渉する勿れ、彼女は汝よりもよく家をやつて行く。
- 三、氣むづかしくある勿れ、むつつりした夫は不幸な妻をつくる。
- 四、妻の感情を害する勿れ、女は感情のかたまりで、男よりも餘程感情を害しやすい
- 五、單に結婚してから何年か経過したの理由を以て、妻を戀することを中止する勿れ。すべて斯る無視は結婚生活に重大の障害を來す。
- 六、ぢらしたり、激しい言葉をつかつたりする勿れ。氣持よく合理的なれ。
- 七、自分のまたは妻の、親類と共に棲む勿れ。
- 八、他の家族と共に往む勿れ。
- 九、身邊の外に不注意なる勿れ。
- 十、子供に無理をする勿れ。若し夫が子供達を怒鳴つたりすると、妻は子供の加勢を

して、夫に反抗をする。

現に僕は家庭を持つて居る、比較的ではあるが、開放して憚らぬ恥しからの家庭を組織して居る。其の家庭の主人として、妻に對する夫として、大體マギー氏の忠言に共鳴する、親切な忠言として、氏に敬意を表せざるを得ぬものである。

新しい人の新しい家庭は出来る、新しがる家庭の人は、何處にも出来るが、當座は面白さうであるが、長くはつづかぬ。つづいて居ても冷たい家庭であり、夫婦共に困つて居るもある。故に多少風情は違つて居るも、僕はマギー氏の忠言を、我國の夫たり、妻たる人にすゝめるのである。

#### ◇兄弟の間

同じ血を分けた人、分たれた人と云へば兄弟姉妹の外にはない筈である。此意味に於て、兄弟は何處までも助け合ひ、いたはり合ひ、はげまし合ひをせねばならぬものである。兄弟の間が仲よく、姉妹の間に水も漏れぬ様になつて居る家庭は、見よいもの



であり幸である。

然し兄弟は他人の初まりであると云ふが如く、他人行儀になり易いも亦兄弟姉妹である。世には相續を争つたり、財産を争つたり、醜い争擾を敢てし、訴訟をやるもあるが、情ない事の限りである。斯る争に對しては親の責任を問はねばならぬものもあるが、新らしい人であつて見れば、やつてならぬことはやらぬ様に我慢が出来ねばならぬとする。

僕は五人の弟妹を有つて居る。兄としては氣がきかぬ男であるが、弟の二人も、妹の二人も、皆盡してくれる。何時でもそれが爲め力強く感じて居り、事があれば先づそれ等に相談をして居るが、都合がよいと云ふ心持よりも、寧ろ幸福を感謝して居るものである。

僕の經驗よりせば、慾張らぬが何よりも大切であると思ふ。親の心を掬みて居り、弟妹の欲する所に心配してやれば、喧嘩も起らず争ふ必要もなくつて常に頼み頼まれ

る、仲のよい關係が何時までも變らぬと信するものである。故に僕は兄弟のない人を氣の毒に思ひ、さぞや寂しい事だらうと同情するものである。

#### ◇主 僕 の 間

主人と呼ばれたり、僕と呼ぶは近來益々尠くなる。可成は主人持を潔とせぬ氣風を生じ、一面生活難は下男下女を使はぬ様にする。

僕婢は家庭に於ては、赤の他人である。故に其の關係に於てよくなれば、家庭は團樂し難く、輯睦が六つケ數くなるが常である。

昔の如く、下男なればとて馬小屋に寝せる譯にいかず、下女なればとて物置に押しこめることは出来ぬが、今の世の中である。人格が尊重され、平等の見地に立ち考ふる今日に於ては、僕も家族の一人として待遇せねばならぬのが至當のことである。

人情は紙の如しと云ふと雖も、世は倖季になれりと雖も、對等の地位に置き、平等の待遇をして、不平や小言は起る道理がない。自分を考へ、自分を思うて、仕事をや



らせば、何等サボル心配もない、若し横着でサボリ、怠惰でズルケルならば之れは別問題である。

僕の所にも一人の男が働いて居る。サボル所かよく働いて呉れる、僕等家族の氣のつかぬ所も氣をつけてやり、僕等の起臥に先立ちて起き遅れて臥る。情は全く人を活かすものであり、人を眞面目にするものと、僕はしみじみ思つて居る。故に僕の家庭では、他人が加はつて居ても、何等差支がなく、反つて賑かであるのである。

#### ◇例外の家庭

家族の共同生活は家庭であるが、其處に統一の力あり、家族相互に分擔の便があり理解し合ふ事が出来ねば家庭と認むる家庭は出来ないものである。我國に於ては家族制度の結果、戸主——家長に重大な責務が與へられて居る、従つて戸主——家長の權威は大であり、權利が強い、之れ丈け戸主——家長たるべきものは、計劃も立たねばならず、統一の力もなければならず、敬度を受くるの徳も具へて居らねばならぬので

ある。然るに多くの家庭には、主婦の權威が強くと、主婦の力の大きなものがある、娣如來と稱する女丈夫は、即ちそれである。斯る場合に於ては、時々犬も喰はぬ喧嘩が起り、争闘が演ぜらるゝものである。然し權威のある所に力が伴ふて居るが故に、結局主婦の制する所となるが習である。之を悟つて男が従順であれば、其處でも春風は湧くのである。何んとなれば、變則ではあるが、其處に統一があり分擔があり、理解があるからである。

故に家庭を愉快にし、善良にするには、主體が何んであらうと、家庭を統一する力が存在せねばならず、男は何、女は何と、仕事に對して分擔が明かにならねばならず家庭相互の人格は勿論、習癖まで理解し合つて、其足らざるは援助し、及ばざるは補足し、所謂共稼ぎ、相身互身の助合が出来ねばならぬとする。

中産以上の家庭では、親夫婦と子の夫婦は別居する趨勢になつて來たが、國民多くの家庭では、同居するが常である。之れは好ましからぬと云つても、餘儀ない結果致



し方がないのである。斯る家庭では親夫婦と子夫婦との間に、尤も嚴肅にして周到なる理解が必要である。昔からある家庭の風波は多くの家庭に於ては、嫁と姑舅との間に隔りが出来衝突が始まるからである。

近來思想の開發が顯著になつて來た丈、それ丈新舊思想の衝突で家庭がもめる乱れる。故に此處に深甚なる注意を拂ひ、周到なる警戒をなすに非ざれば面白い家庭は出来ないのである。

僕の家庭にも老人が居る、之れは母であるが、僕は常に母と家内との間に氣をつけて居る、世間話に事よせて説教をやる、そんなものかと分れば、事なくすみ、穩に事が運ぶ。要は公平なる判斷を下し、公正なる處置をとることであつて、徒に家内に味方はすべきでない。

くわいらい子胸にかけたる人形箱 佛ださうと 鬼を出さうと

全く、責任者の心一で如何にもなるものと、僕は體驗して居る。

成程、時には困ることもあるが其時には忍の一字で所斷する。忍は衆妙の門とあるが、全く其通りであるとする。唯だ多くの人は、忍の功德を知つて居るが、それに處するの道知らぬが故に、遂に勘忍袋の緒を切つて、百仞の功を一簣に缺くが如きことをする。

心せよ なる堪忍は誰れもする ならぬ堪忍するが堪忍

といふがあるが、全く其通りである。多くの場合、ならぬ堪忍するが堪忍と心得ながら、それが出来ずなるは、腹にもてすなり、胸がはり切れさうになるからである、其場合、親しき友人を訪ねて、思ふ様不平を吐き出す、信する師尙や先生の所に住つて、存分に愚痴をこぼすことである。爲めに胸がすき、腹が減つて來、友人から慰められ、師からは教へらるゝ。其處でならぬ勘忍も、勘忍することが出来ることになる之を忍に處する道といふ、中には歌をよむで氣を轉ずるもあり、詩を作つて心を慰むるもあり、或は筆を呵して我慢するもある、皆忍に處すの道である。



### ◇家庭の輯睦

一家の團欒は、家族の人の間に忍の徳が守らねばならぬとする。つまらぬことに感情が衝突したり、腹の立て合ひをして居ては、平和な家庭は出来べくもない。故に何時でも、何處でも、何人でも、平和なる家庭、善良なる家庭をつくらんには、忍の一字を確守する心得がなければならぬとする。唯だ忍ぶ丈けでなく、忍に處するの道をも講究して置く必要があるのである。

錦の裏はぼろの如し、であるが圓滿なる家庭、平和なる家庭の裏面は犠牲である、と僕は敢て云ふものである。我利、我慾、我優を押し通し合つて、到處理想の家庭は出来るものでない。それは恐らく單に家庭の上のみでなく、一般の社會も亦斯くの如しとする。

最近、西洋……外國思想の流入によつて、少しでも中等以上の教育を受けた人達になると、徒らに西洋かぶれをして、所謂新しがり老人連中は理解がない、話が出来ぬ

問題にならぬと云つて、親を頭から踏みつけて相手にせず、自分だけが聖人氣取りをして居るものがある。

教育ある人、上流の家庭となるに従つて家庭の紊亂して居るものが多いのは、如何にも遺憾至極の事である、實に心あるもの、寒心に堪へない事である。

### 二、嫉 (教育)

#### ◇全身大和魂

前述の如く、我が大和魂の養成さるゝ所も、皇國精神の涵養さるる所も、等しく家庭であつて、それは嫉けで出来る、又た出来ねばならぬのである。

日露戦争前の露西亞は、日本は我敵にあらずと見縊つて居つた。之れは軍隊の力でも、武器の精銳でも、富力でも、露國が日本より優れて居つたからである。而も一度戦を始むるや、露國は連戦連敗の憂き目を見たのである。此に於て、當時の責任者で



あつた陸相クロボトキン將軍は感慨の極、其原因を調査する事となり、その感想録は我參謀本部で翻譯して民間にも出した事がある故、注意深き人々は必ず一讀した覺えがあらうと信ずる。

要は、大和魂の力を勘定損つたといふのであり、我皇國精神の威力を考へ損つたといふのである。それでクロボトキン將軍は如何に國民精神が大切であるか、國民の魂が恐るべきやを國民に教へて國民精神の涵養や國民の魂を養成する事の必要を説いたのである。

其一節に大和魂、皇國精神の涵養に付て、英國人の觀察を載せてあるを見ると、日本國民の魂、精神は教育にて教へたるにあらず、法律を以つて強制したるにもあらず、母親が乳を呑ませる時、一所に飲ませるのである。

といふがある。僕は、今更英國人の觀察の鋭さを知ると同時に、家庭教育の大切なるに驚嘆するものである。

全く、我帝國の中堅が武士であつた當時は、武士の家庭では、忠臣義士の傳を寝物語に子供に聞かせたのである。母親が赤坊に乳房をふくませて、何を語つたかと云へばお前も早く大くなり、君の御用に立たねばならぬぞ

忠義の二字を忘れてはなりませんぞ  
と云つたものである。乳と一所に忠義の精神を飲ませて居つた、斯くして大和魂は三つの子から注入されて居つた。之れが、全身大和魂の權化であるかの如き大和民族を作つたのである、皇國精神で終始する日本國民を作つたものである。

#### ◇家庭は教育の道場

又た技藝にかけても、作業にかけても、兄之を教へ、父之を鍊へて、子弟を教育したものである。姉之を導き、母之を教へて、弟妹を訓練したものである。今日でも日記をつけさせる事や、日々の收支を明にさせる事や、飲を焚く事や料理をする事や御客を接待する事などは、家庭で躡けねば役立つ人間にはならぬのである。



それ故に、家庭に於ては、父母兄弟は立派な師であり、指導者であり、先達であらねばならぬものである。同時に家庭は教育の道場であり、訓練場であらねばならぬのである。此理解ある家庭、此抱負ある家庭では、決して不良の徒や、不逞の輩が出るものではないのである。

今日の世の中、動もすれば、公事を後にして私事を前にし、大義名分を輕んじて慾得を重んじ、體裁を貼るを賢い事として技能を忽にする民風が増長し、小は個人を誤り、大は國家に累を及ぼす傾向の顯著なるは、家庭の躰が重んぜられず、家庭教育が振はぬに歸因するとする。

試に見よ、民衆の儀表たるべき官公吏は、住居の一定せぬ爲めに多くは神棚もなく佛壇もない故に祖先崇敬の訓練を家庭に行ふ事が出来ぬ。一般民衆は生活難に脅威されて、斯る儀禮に志を行ふの餘地がないのである。これが爲に祖先崇敬の觀念が薄らぎ、習慣の削減し去るは、誠に情ない事であるとするとする。

加之、口を開けば自己の利得、自己満足、自己宣傳の言にあらざるなきの有様なれば、二六時中それに浸さるゝ子供も、何時しか斯る人に化せらるゝは當然の事である。之れ今日、滔々乎として私利私慾に驅らるゝ人の出来る所以である。

#### ◇英國の紳士道

故に今日の民風を振興し、國法精神を肅正せんには、家庭教育、其躰の振興を高唱し、之が道に最善を期せねばならぬとする。單に學校教育に没頭し、今日俄かに社會教育の降盛をはかるも、家庭教育が振張され、肅正されねば、効は少いものと斷ずる。世人、動もすれば英國人の紳士道を賞賛するが、人も知る如く、英國は學校、社會家庭の三教育がよく調和されて居るのである。故に英國の紳士道は三教育協調の産物であり、教育調和の結果であるのである。

當年の武士階級は消滅して、今は四民平等となつた以上は、四民が此處に覺醒して家庭の躰に重きを置き、家庭の教育に深甚の注意を拂ふにあらすんば、我が大和魂も



日に消滅し去り、我皇國精神も委微し去るに相違あるまいと思ふ。僕は斯る事を想像する事すら忍びぬ、斯くなる事を豫想する能はざるものである。

皇國彌榮の爲めに、帝國興隆の爲めに切に家庭教育の振張、家庭の躰の肅正を祈るものである。

如上の主張と念願とを有する僕の家庭教育、家庭の躰を敢て参考の爲めに掲ぐるも無駄な事でないと思ふ。

一、祖先崇敬、皇室尊崇の儀禮を行ふ事。

母は毎朝佛壇に禮拜、戸主なる僕は家居と然らざるとの別なく、皇居の遙拜をなす。

一、上下の別を明かにする事。言語動作に就て、長上に敬意を表はす事。

一、日誌、日計簿の記載をする事。

妻之を分任し、僕の分は僕自ら之をなす。

一、接客の用辨を主とする事。

酒食は請待の外之を用ゐず、用談がすめば、お互に用を妨げざる事とす。

一、御互に自身の用は自らする事。

婢僕は可成使はず、家族分擔して勤勞の風を家風とす。

一、家庭は解放する事。

何時でも何人でも來るものは拒まず、往く者は追はず僕の弟が來て時々、部屋の整理をする。

一、家庭にありて化粧はせぬ事。

妻も娘も實行して居る。

一、公を重んじ、他に迷惑をかけぬ事。

公務の爲め、公共の爲めに僕は家居せぬ事が多いが、家庭は不平を言はず、何人も他に借り物はせず、充分の寄附は喜むとする。



一、貯金を怠らぬ事。

他に迷惑をかけぬばかりでなく、非常の用意をなす。娘の結婚費用も、貯金の額で制限す。

一、近い親類は親密に交際する事。

休暇の場合は努めて往來し、世話をしたり、世話になつたりする。

一、法事と墓參、伊勢詣では怠らぬ事。

法事と墓參は年忌に必ず行ひ、伊勢詣は家族一同で三ケ年目に一度する。

一、家族は秘密なき事。

僕の手紙は家族に解放し、家族の手紙は僕に解放して居る。行き先きは明瞭にし交友は男女の別なく、之を家内に紹介する、大藏大臣は僕の妻です。

一、戸主は萬事に油断せぬ事。

戸主は一家扶養の責任者である故、常庭に家の絶対信頼を受くべきものと心得て

居る、而も信頼は絶対に強要すべきものでないとして居る。僕の家庭に怒聲（僕の）を聞いたものがないと自ら信じて居る。

一、客の接待は必ず家庭でする事。

十人であらうが、廿人であらうが、三十人であらうが、誰れであらうが招待は必ず家庭料理である。人に招かれて料理屋に往くが、人を招いで料理屋に飲食した事は、二十五年の安城生活では一度もない、来る人も、其方がよいと喜むで呉れて居る。

◇家庭は子供本位

僕の家庭では、常に春風が吹いて居り、子供もノンビリ育つて行き、来る人も居心持がよいと言つて呉れる。故に家庭は僕にとりては、唯一の休息所であり、療養場である事を、常に喜むで居る。而も僕の家には、他人が必ず居る、頼まれて置いて居る人は、或時は十人も居つた事がある。世話は出来るが、爲に僕の家庭を亂された事は



一度もない、田尻子爵、金原明善、田村又吉、氏の如きは、よく僕の家庭に来て下さつた方である。斯る方々によりて、家庭で教へられた事の多い事も特筆せずに居られないのである。

最後に一言しておく事は、家庭には親本位のものの子供本位とがある。僕は將來を思ひ、未來の彌榮を念願する主義であるから、家庭は子供本位であると謂ふが、然し子供の爲めに來客を謝絶つたり、子供のするが儘に何事も棄て、置く程徹底したものでない事を附け加へて置く。僕は子供に對する母性愛を認め、之を慶び、之を敬して妻に子供の事を任しておく。此點では僕は妻に對して絶対從順であるのである。

### 三、家　　風

#### ◇家風の尊きこと

何處の家にも家風がある。それがあると何人も認めて居る。其證據には離縁の文句

に因る場合には常に家風に合はぬとするが常であり、さう云はれて納得すが我國風である。故に家風のあるを知るべく、家風を認むるが我國民性である事も分る。

家風は家の習慣である。代々の家族の行狀を律するものである。家の相續を維持する柱とも認むべきものである。家庭の輯睦が家風なる所に於ては、我慢をし、勘忍して、以て家庭の平年を破らぬ事に各自努むる。勤勞が家風である所には、如何なる場合でも家族が事業を分擔して不平なしに働き、働く所に満足する。祖光崇敬が家風なる所に於ては、何事も祖先へ報告し、日常祖先の靈を祭らねば氣がすまぬ事になる。規律が家風の所に於ては、起臥の時間は勿論物品の置き場まで整然として配置する事に皆が力を入れる。質素儉約が家風なる所では、粗衣粗食も問題にならず、無駄な事をせぬ事に用意が周到である。風流を尊ぶ家風の下には、歌や發句は學ばずして一家をなすものが出來、娛樂に困らぬ者も出來る。家風の人を化し、人を造る力の偉大なる、全く想像外のものがある。



今日の人、よく家風を言ふも、如何なる家風があるやを認むる能はざるがあり、都合上家風を持出すが、何が家風かを尋ねられて答ふる能はざるもあるは、笑止の至りである。一時風雲に乗じて成り上がるも、忽ち没落して、物の哀れを止むる家が多いのは、家風の貴ぶべきを知らぬが爲めである。上流の家庭が亂れ、門閥の家が没落し、家格のものが滅亡するも、多くは家風を尊重せず、家風を維持せず家風を認めぬからである。

◇家風は人を化す

社會の風潮は人を化するといふが、家風も亦人を化するものである。上流の人の行儀のよいのも、品格のあるものも、それは家風がしからしむるものであつて、教へて出来るものに非らず、導いて俄に出来るものでもない。

今日人は動もすれば、己を守るに急に、己を損ふ事を恐るゝ結果、家庭を秘密にする弊がある。斯る所には立派な家風は出来ぬとする。家風は公開的であり、民衆的

であるを要する。公然人に見て貰ふ事も出来、見せて恥しからぬものであらねばならぬものである。僕は此意味に於て、家庭を開放して居り、敢て教を求むる人に請うて居る。それでよい家風が出来、家風が洗練さるゝものとする。

◇家族制度の長所

家風を認め、家風を尊重するは家族制度の長所であり、特徴でもある。それによりて、祖先崇敬の國民性も涵養され、系統尊重の實を全ふする事も出来、結婚を肅正する事も出来、家庭に脈々たる規律が保たれ、子女の教育を全ふする事も出来るのである。故に家風の存する所に於ては、何處までも其維持向上に努め、家風の存せざる所に於ては、各家風を樹立せる事にせねばならぬとする。

家風の樹立には、家憲の制定を便利とする。家憲には不文法と文法とがある。榮ゆる家で、地方に家格の認めらるゝ所に於ては、文章にしてあるが多い。其二三を示せば、



◇本間家の家憲(山形縣酒田)

- 一、皇室を尊崇し神佛を信仰する事。
- 一、慈善を旨として陰徳を重んずる事。
- 一、質素を守り勤儉の美風を發揚する事。
- 一、國家地方郷里の爲めに全力を竭くす事。
- 一、教育は文武兩道を勵み忠孝を專にする事。
- 一、當主又は嗣子は相續前以後必ず全國を巡廻する事。
- 一、事業は一家一門にて分擔經營する事。
- 一、飲酒を謹み蓄妾を許さざる事。
- 一、投機事業に従事する事を許さざる事。
- 一、富豪の者と縁組するを許さざる事。

◇古橋家の家憲(三河國稻橋村)

- 一、子々孫々敬神報國を忘るべからず。
- 一、祖先を尊び、遺志に悖るべからず。
- 一、家は徳に榮ゆべし。
- 一、公共事業に盡力すべし。

但し之に投する費用は當主の企業益を以てする事。

- 一、一生勤勞すべし。
- 一、如何なる物をも無用視すべからず。
- 一、妾を置くべからず。
- 一、遊藝は一切なすべからず。
- 一、大禮を除く外、六十歳以上ならざれば、絹布を纏ふべからず。
- 一、精神修養又は偉人崇敬のためにあらずば、書畫骨董は講入すべからず。

古橋家の家憲は他に發表をせず、先代源六郎氏に付き大意を聞きたるものなり



家憲は家の憲法であれば、何處までも嚴守されねばならぬ。子孫にして之を改正するはよい、但し守らざるもの生ずれば、必ず其家亂れ、家系斷絶を見るに至るのである。古き家、名門の家にして、連綿として榮ゆる所には、必ず家憲の存するあるを知るべきである。

家憲の代りに、家訓の存するがあり、之を守りて彌榮を得るもある。二三を示せば

◇蟹江家の家訓

神祇は敬せざるべからず、上令は奉せざるべからず、祖先是念はざるべからず、父母には孝せざるべからず、兄弟は睦くせざるべからず、子孫は教へざるべからず、職業は勤めざるべからず、行儀は修めざるべからず、用財は節せざるべからず、孤窮は恤せざるべからず、是禮儀の大經なり。若し夫れ神を敬し瀆さず、其令を犯さず、祖を念うて能く述べ、親に仕て能く敬し、友と睦しくして鬪がす、教訓方あり、業を勤めて愚事なく、義を行うて能く利し。節儉にして吝ならず、惠施して徳ならざれば

之を禮の物をよくすると謂ふが、盛世に優遊して樂むで年を卒ふ、其道は斯の如き已矣。

◇大橋家の家訓

- 一、遠津祖先是敬ふべし。
- 一、人たる道を守るべし。
- 一、悪しき行なかるべし。
- 一、家業を勵み勉むべし。
- 一、皇國の御恩を思ふべし。

右五ヶ條は確守すべし。

- 一、客に接するに飲食を以てすべからず、誠意を以て之を待つべし。
- 一、時は金なりと云ふ格言あり、時は大切にすべし。
- 一、食物は大切に取扱ひ粗末にすべからず。



朝夕の物喰ふ毎に豊受の

神の恵みを忘るゝなよ人

一、飲食物は人生最も注意すべき者なるも美に過ぐれば家計に影響を興へ、粗に流るれば人體に害あり、故に日々の食物は大略を左に定む、炊事を掌るもの、時に是れを便宜に處置すべし。

(食物の大略は之を略す)

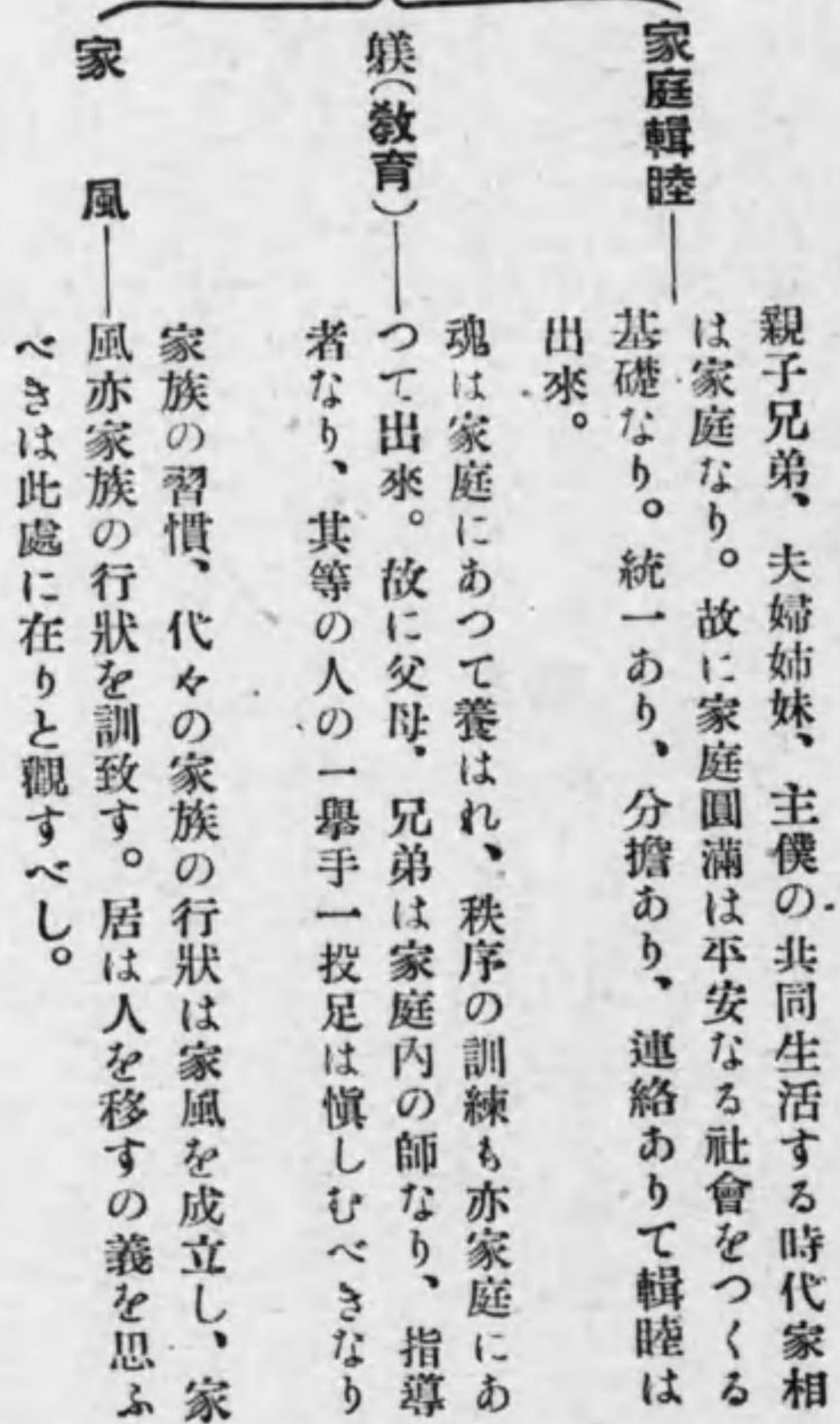
◇齊家の基礎

よい家庭と見做され、子孫繁昌する家と認めらるゝ所では、如斯、家風の樹立に努めて居る。故に國家の興隆と相俟つて家門の繁榮を思ふものは、家風を樹立するが、單に祖先に對する所であり、子孫に對する義であるばかりでなく、全く國家の爲めであるとする。

齊家の基礎は家風の存在する事であり、齊家の用意も亦此處に有るのである。之れ

僕が特に家風の樹立を高唱し、其必要を叫ぶ所以であるとする。

家——家庭





### 三家 産 編

◇恒産あれば恒心あり

諺に「恒産あれば恒心あり」とあるが、恒産の下恒心の出来るや否やは問題であるが、心に聊か安定の出来るは間違のないことである。

恒産さへあれば、漫りに狼狽せぬことになる、強て人に厄介をかけぬことになり、無理算段をせぬことにもなる、それ故に何んともなく楽しみが出来、接する人に安心をも與へることが出来、自他の幸福が招來さるゝことにもなる。

◇汚い者の三幅對

然し世の中には因果な人があるもので、財産が出来れば出来る程財産に執着して汚くなるもある。

世に汚いものゝ三幅對とて、金庫の中に金がたまればたまる程、汚くなり、たん壺の中したんがたまればたまる程汚くなり、糞桶の中に糞がたまればたまる程汚くなる。切角貯金して、たん壺や糞桶と兄弟分にせらるゝは、情ないことであり困つたことであるが、斯るものは慥に世の中にあるのである。而かも之れが當世の流行であり滔々乎として流布するが今の世の中であると、觀せねばならぬ場合もあるが實際である。

◇僕の境遇

僕は貧乏士族の家に生れ、親から相續したのは借金のみであつた。五人の兄弟の内、女一人は親在世の時に方付いたが、他は自分が引受けて處理する任務があつたので、僕は財政上非常の苦境を嘗めたものである。親から相續した無形の財産として、僕は負けじ魂と金の爲めに働いてはならぬとの信念とを得たことを幸とする。然し一面借金の始末をなし、一面兄弟の身の振り方をしていく上は一通りや二通りの苦心では



なかつた。男の兄弟は皆大學を卒業させた。女一人は嫁入りをさせた。兄弟の方付く頃には自分には子供がふえて来る。而も僕は財貨のために他に厄介はかけなかつた。奢な振舞はしなかつた。交際は一倍盛にした。斯る難局に處して、よく之れを凌ぎ得たのは、僕を理解し僕を助けた、僕の妻であることを特筆せずには居られないのである。

僕は金原翁に接し、田尻子に可愛がられた、其爲めに泰然として財政難を切りぬけることが出来たと思ふ。金原明善翁は民間の勤儉王であり、田尻子は官界の勤儉王であつた。金原翁は民間の事業をすゝめた人である、田尻子は國家の財政基礎を建てた人である。境遇は違ひ、地位は異ひ、身分も違つて居つたが、此兩人は心からの友であつた。國家を思ふの誠意、民衆を思ふの至情は、兩人に差別がなかつたものである。僕は此等の人に接して、或は教へられ或は導かれ、或は叱かれ或は激勵されて、僕の心には光明が何時も輝いたことを感謝せずに居られないのである。

金原翁に接しては、物を利用することにいたく刺戟を受け、其爲めに儉約の眞諦を得た處がある。田尻子に接しては、主義に立つ事の貴いことや操守の功德を悟ることが出来た思がする、勤勞は生なり、懈惰は死なり、の信念を得たのも其頃であつた。百里の行程は一步より、巨萬の富も一厘より、との悟りに生きることが出来たのも當時からであつた。貯蓄がなければ、志ありと雖も之を行ふ能はず、とのつらい經驗をして、何事にも規定をつけることにしたのも、やはり其頃であつた。

僕は親から相續した借財は綺麗に返済した。兄弟は全く獨立せしめ、自分の子供二人は縁つけた。今日の僕は食ふには困まらぬ、公共、公益、慈善は何時も應分の寄付をすることを忘れぬ。學生の世話は今尙やつて居るが、前後十數人を數へる事が出来る。而も僕は貸與したものを催促したことはない、僕は見ちがへる程健康を喜むで居り、老いて益元氣旺盛である。今日の僕は、全く財産に些の心配もなければ、苦勞もない。



### ◇齊家の一要素

斯る經驗に徴して、僕は齊家の一要素として家産を説かねばならぬとする。今日の人は、家産の爲めに苦しむで居り、煩惱して居り、煩悶して居り、争つたり、戦つたり、見悪いこともして居ると思へば思ふほど、家産を説かざるを得ぬ心持がする。

西郷南洲先生は、子孫の爲めに美田を買はず、と云はれたが、確に名言であり、權威ある格言でもある。何人も斯くあらねばならず、斯くあり度いものであるが、恒産がなければ、凡人は迷うて愚痴になり、惑ふて自暴自棄に陥るが常である。恒産があれば生活に追はれぬことにもなり、生活の安定も出来、従つて危激の俗、輕佻の風も少くなるが、世の習なりとする。

### ◇恒産に二種

尤も恒産に有形、無形とあるは當然である。財貨といへば有形的に考へるが常識とする、然し人の健康、信用、知識、能力は忘るべからざる無形の財産なりとする。僕

が茲に説述するは、主として有形的のものであるが、無形のものもを閑却するものに非らず、又た無形のものもを忘却するものでないことを、特に記して置く。

家産を説くに付ては、家業、家政、家産に區別するを便なりとする、便宜に従つて以下説述するへする。

## 一、家業

### ◇家業の意味

家業は家の職業であり、家人の従事する業務である。人にして業のなきは、恰も船は羅針盤のなきが如しである。今日は人の増加が激しくして、事業はかへつて萎微振はぬ勝ちである故に、動もすれば失業者が出来る。世の中に氣の毒なものは、失業者であり、就職の出来ぬ人である。斯る氣の毒な人を出さぬ事にするは、一は社會制度である。一は民心の開發に待つべきであるが、斯くの如きは、此處に論する限りで



はないのである。

家業は時勢の進歩につれて殖えるものである、二百年の昔、英國のグラスゴーとかで調べた時には、二百種とかであつたが、今日で二萬餘りになつて來て居るが、數の正確は分らぬが、殖えて來る事だけは、誰れでも分る筈である。

#### ◇婦人の仕事

昔は表立で働いたものは、大抵男子であつたが、今日は婦人の仕事が増え、婦人も亦公然職業を持ちて世に立つ事になつた。それ故に男女の間に職業の争奮戦が行はれ領域の争も生じて來たのは、面白い社會現象である。

然し多くの家庭では、男子が主働者であり、女子は所謂内助的な事が多い。子供の哺育や世話は女子でなければならず、縫ひ洗濯亦女子の仕事であつて之れが家庭生活上必要であれば、女子が内助的となるは已むを得ぬ事とする。之れ故に良妻賢母と云へば特別の場合を除くの外は内助的であるが多いとする。

官公吏として男子が勤むる所では、女子は多く留守居を守る事になり、銀行會社等につとむる主人を持つ妻君亦家居勝ちである。然し國民生活の中で、斯る生活をなす人は比較的少數で、所謂實業に従事するものが多く、特に農民生活をなす者は、一職業に従事するものとしては、尤も多數を占むるか實狀である。

今日では都市生活者と、農村生活者とは殆んど同數であらう。然し同一職業者としては農業に従事するものが誰人にも異存のない事とする。それ故に僕は主として農家の家庭について講述する事とする。之を應用する事に於て、他の業務者に對しては、大した不都合はないと信ずる。

#### ◇農家の家業

農家は農業を家業とするは分りきつた事である。而も農家には地主、自作、小作の別があり、細分すれば、地主兼自作があり、自作兼小作もある。全然農業をやらぬ地主は國勢調査の時には無職業として推定された事故、農家の中に入れぬが正當とする





もあるが、地代によりて衣食する以上は農家の中に入れて居るが常である。然し斯る地主は數に於ては少數であるから、僕は之れを目標として説く必要がないと信ずる。大小に關らず土地を耕作するか土地を利用しての生産業に従事するものか、多少に關はず地産を上げる人は、農家としては多數である、農業によりて生活し、農業によりて家産をつくる者は、農村生活者の多數であるから、僕はそれを主體として講述する。

#### ◇農家収入の源泉

農業生産は農家収入の源泉であり、家産造成の根本である。それ故に農家は農業生産の最善の努力をいたし、それに最巧の能力を發揮せねばならぬのである。而も農業は商工業や銀行業などと違ふて、天地と共に働くべき仕事であつて、人力のみでは全然出來ぬ事である。又た、農業には收穫漸減率があつて、資本や勞力の増加に正比例して生産を増す事が出來ぬ。故に等しく營利を目的とする業務なりと云ふと雖も、商

工業や銀行業等と同一視すべきでないとする。農業者は此點に目醒めて、商工業や銀行業等と營利の比較をしてはならぬのである。農業は營利以上の收穫があり、金錢で購ふ事の出來ぬ貴きものが得らるゝ所に權威を有する事に悟るが、眞の農民である。

#### ◇生産の三方面

凡そ生産には新に生命を作り出す事、新に價值を作り出す事、新に効用を作り出す事、の三方面がある。商工業等は後の二方面しか生産し得ぬものであるが、農業だけは完全なる生産をなすものである。特に新に生命を作り出す事に農業生産の面目があり、價值があり、功得があり、權威があるのである。それ故に此處に目醒めて、泰然として農業を營むものは凡る業務者に比して健康であり、長命でもある。父子孫々此處に落付いて、敢て業をかへざれば、家業は連綿として百世萬世に絶える時はないのである。之れ榮ゆる國家、彌榮の國家は必ず、農を以て國本とする所以でもある。

#### ◇商家に三代なし



古來、商家に二代なしとあるが、東京や大阪や、其他都會の地に就て、家系を調査して見れば今尙其諺が偽りでない事が分る。營利を目的とするか、長命を目的とするか、金か命か、は正に各人の考慮すべき事である。僕は此意味に於て農業尊重の叫を高唱し、如何なる業態の人も、農業を尊重するものなりと懲慥するものである。

今日は世間滔々乎として、營利のみに氣が馳せ、眼を注ぎ、心を專にする事になりつゝある。一にも金、二にも金、三にも金、死んでも金、とするが現代國民思想であるとする。それ故に生命の流れの貴きを知らず、生命の貴きをも知らぬ、社會現象が日に、益益しげくなる。世に若し亡國の兆ありとせば、斯る事であらうと信する。咄。支那の經濟學者李俚は、勤は財の本なりと云つて居る。全く農業にいそむ事によつて農家は收入を得、收入を殖す事も出來、財を作る事も出來るのである。それ故に農家としては、如何に勤めべきやは、家産造成の上に於て、尤も肝要なりとする。僕は勤勞の四要素として、常に健康、智識、信用、根氣を數へる。それが一の仕事に集

中する所に、より優れたる勤めが出來るとする。

更に勵めべき方面としては、生産と交換とを主として數へる。生産は多收、良質、確實を期する事が出來ねばならず、交換に付ては賣買取引に巧妙を期せねばならぬとする。之を一括すれば、即ち農業經營をよくせねばならぬ事になるのである。

◇農業經營の四本柱

農業の經營に付ては、僕は四本柱を建てよと云つて居る、即ち

精 勤——主義か信仰か人生觀かに立脚したる

合理化——學理の應用、倫論の應用による

農業經營 組織化——多角形——米、麥、蠶の如きを三角形、それに野菜を加へれば四角形、其上に果樹を加へれば五角、更に加工を加へれば六角形と云ふ如し

共同化——農會、産業組合、農業倉庫、實行組合を利用し、作業の共同、土地の共同の管理等をなす



農業經營に付ては、精勤を先決とする。但し働き損の疲れ儲けをする場合があつては、自ら精勤がいやになるのが人情である。故に合理化をやり、一舉手一投足、無駄働きをせぬ工夫をする必要がある。而も我國の農業には共通の缺點がある。それは耕地が餘りに狭い事である。それが爲めに繁閑が出来て來、閑の時に繁しい時に得たものをなくして仕舞ふが缺點である。之を補足するには勞力の分配をよくせねばならぬのである。此處に於てか組織の改善が必要となる。それを組織化と云ふ。所が斯くする外は、資本の融通が必要になりて來、勞力の節約が出来ねばならぬ事になり、販路の擴張が大事な事になる。さうなつて來れば、愈共同せねばならぬ事になり、此處に農會や、産業組合や、農業倉庫や、實行組合が出来ねばならぬ事になり、それ等の共同團體を利用せねばならぬことになる。

#### ◇農業經營の改善

現在の農業經營を改善して、農家の收入増加をはかるは、組織化と共同化とに進歩

をいたすが捷徑である。從來、此方面を閑却して居つた丈、それ丈此方面に工夫し、努力を新にする事が必要である有利である。

勿論、農業は土地を相手にせねばならぬ業務であるから、土地をよくし、水利をよくし、地質をよくし、運輸の便をよくする事は、根本的の事である。それが爲めには耕地整理をせねばならぬ所もあるであらう、灌排水に特別の施設をなさねばならぬ所もあらう、深耕や肥培を入念にせねばならぬ所もあらう、道路の開鑿や交通機關をつくる必要のある所もあらうが、それ等は多くの場合、必ず共同を要するものである。共同によりて有利とし、共同によりて迅速に利益を見る事になるものである。

兎に角、我國の農村は、山村と目すべきがあり、漁村と見るが當然なる所もある。平坦部の純農村もあり、高地のもあれば低地にあるもある。それ故に所に應じ、所謂臨機應變の巧智を要し、技術を要するは、各人の正に覺悟すべき所である。

要は、量に於て多きを得、質に於て良きを得、而も何時でも確實に收穫する事が出



來ねばならぬのである。更に生産物の處分がよく出来、有利に販賣する事が出来ねばならぬのである。とつて賣る事が上手になればなる程、農家の収入は確實であり、収入が増加する。農家の勤勞に斯くの如くして、能率の高さを示す事になる。

#### ◇共同の力

佛書に「五指の交彈は一拳の擊に如かず」と云ふがある。共同の力を説いたのであるが、今日の農家は、小にしては一家の共同が出来ねばならず、中には隣近所の共同が出来ねばならず、大にしては一村一郷の共同が出来ねば、農業の經營を進めることが出来ねが、今日の時勢である。此處に目醒めし人、所は必ず農民として優者となり、裕富な町村を作るのである。全く今日の振興する農村は、共同團體の活動によらねばならない、共同耕作を見ぬ所もない。それ故に勤勞の効果を大にし、因つて以て農家の収入を増大するは、共同によるの外なしと觀すべきである。

#### ◇働き損の無いやうに

斯くの如く説き來りて、農村の現状を見ると、思半に過ぐるものがあらむ。今日は動もすれば勞働忌避の弊風を見、尙學理の應用に熟せずして傳統的に流れたる點多く、未だ組織化に目醒めずして勞力の不平均なるが多く、共同に至りては容易に出来ずと觀念するが多いとして見れば、農村の疲弊、農家の困憊亦偶然ならずとする。

政策的に論議すべき事は澤山あり、政治的に講究すべきも亦多い、然し農村振興の第一義は、農家をして働き損の嘆をなさしめぬ事である。即ち彼等の勤勞によりて収入の増加を確實にする事にありとする。それには、農業經營の改善に歩を進め、所謂四本柱を立て、勤めしむるに在りとする。實際、如斯して農家の産を高め、財産をくりつゝあるが、到處にあるのである。各府縣農會が成功農家として、世に紹介しつゝあるは、即ちそれである。

#### ◇時勢と家業

世の進むにつれて、職業は多くなる。僕等の子供時代には自轉車もなく、自動車も



なく、飛行機もなかつた。今はそれがある故に、それ等に關する職業が澤山出來て來た。それ故に何かの職業を家業として世に立つ事が出來、自分ばかりでなく家族を立たせる事も出來る。それが出來ずして、一定の家業を持たず、所謂失業者となつたり放浪の生活をなすものは、時勢に順應が出來ぬものか、働く事を忌むものであるとする。

家業は家族を扶養する資源であり、家族を安定せしめる源動力であり、家族を向上せしむる原因でもあれば、なければならず、あるが原則である。然し世には家をなす能はざるものがあり、家と没交渉の生活をなすもある。然しそれは少數であり、例外とする。苟くも人として世に立つ程のものなれば家が出來ねばならず、そうせねばならぬ氣持が家をつくらずにをかぬものである。

## Ⅰ 家業の種類

家業には自由なると、不自由なるとの別があり、資本を要すると要せざるとあり、生産に従事すると然らざると、色々に分別さるゝが、今は煩を避けて、思ふ所あつて如上の三に附て少しく述べて見たいと思ふ。

### 一、自由と不自由

今の世は矛盾、撞着の世の中であると云ふが、全くそうも思はれる節がある。其最も主なる者は、自由を貴むで、而も不自由の業務を家業とするを欲する民風の盛なる事である。

問學の徒は、口に自由を呼び、自由を憧憬するが如く見えるが、多くは官吏を希ひ役人を欲し、會社員にならん事を要望する。換言すれば、月給取、サラリーマン、俸給稼ぎを目的とするが多いのである。教育に恵まれざるものや、愚者は兎に角、時勢が分り、時の流を悟り、物の本質が理解されねばならぬ有識階級に屬するものに斯る希望を有するものゝ多いは笑止の沙汰であるとする。



官公吏は勿論人の爲めに働くものは、貴い自由を棄て、奉公奉仕ほうこうほうしに生くる所に價値があり、其處そこにそれ等の人の存在そんざいに意義あるのである。而も奉公の誠をいたすの覺悟なく、奉仕の觀念に生くる心得なくして、勝手次第をなし、他に驕り、動もすれば多衆を頼むで以て相手を壓迫せんとする行動を敢てするもあるは、全く身の程を辨へぬ仕方である。

自由意志によりて行動し、營業し得るものは、世間では一口に實業家と稱して居る。實業家の貴い所は自由の立場で働き得る事であり、自由意志の活動が出来る事にある昔、堯の民は、

日出で、耕し、日入つて息ひ、田を植へて食ひ、井を鑿つて飲む、帝力それ我を如何にせんや

と歌ふたと云ふが、其處に農民の自由があり、自由の貴さが偲ばるゝのである。商業工業にはそれ程の自由はないかも知れぬ。然し役人や軍人や公務者が辭令一枚で轉々

たるに比し、犯されぬ自由のある事が分るのである。

都市はそれ程でもないが、農村には今尙公務者が一番暮らすによいとの觀念があり舊い人達の間にも月給取が良いとの思慮がある。學問をする人、教育に恵まるゝものにも、其觀念思慮に制せらるゝが多い。農村の人は低級であるといへば、成程と思はるゝであらうが、偕て學問の徒のそれは何んと云ふべきや。

職業に勿論貴賤の別はない、業務に尊卑の區別はあり様がない。それ故に奉公奉仕に燃へて公務者となるもよい、使傭人となるも結構であるが、それは不自由なる境遇を承知の上で、奉公の誠がつくさるゝに限るのである。生活の方便に供したり或は筋肉勞働忌避の意味で、之れを欲し、之れに従事すは悪い慮見であるとする。同時に自由の貴きを知り、自由の境遇に立ちて喜ぶは良い。而も油斷がならぬとか、確實の収入得られぬとか、働かねばならぬが困るといつて、自由の業務を棄て、不自由の人にならむと欲するも、亦悪い慮見である。



今日の世は、官公吏が人に驕るの弊に惱まざるゝが多い、民衆に意張りて得意がるも多い、官公吏優遇論が出で、尙更斯る感じがするのは、誠に醜い事の限りであるが、之れが當然と見らるゝ程、斯る不心得の人が多い。それを見て羨間敷思ふのか、それに擬せんと欲するののか、自由の立場に居り自己の自由意志で始終の出来る實業家に敢て、官公吏たらん事を希ひ、問學の徒亦其風を望むで、運動まで散てするを辭せぬ傾向を見るは、全く情ない事の極である。

官公吏に奉公奉仕に目醒め、犠牲的觀念を以て勤むる所に價值がある。實業家は貴い自由に自覺して、其地位を感謝しての努力をなす所に、價值が認められ、其存在もあり、向上もあるのである。

今の世、家業の選擇は自由であり、何をやらうとしやうと勝手である。唯だ目醒めべきに目醒め、自覺せねばならぬ所に自覺するに非ざれば、家業の生命はない事になる。

## 二、資本を要すると要せざるもの

資本と雖ども、此處に謂ふ資本は有形の財である。有形の財として目立つものは、土地と金と物とである。獨立の營業をなさんと欲せば必ず資本を要し、自營せんと欲せば資本がなければならぬとするが、人の常識である。

農家であれば土地は絶対に必要であり、商工業家には所謂商賣道具がなければならず、商品がなければならぬは、云ふまでもないことであり、唯だ獨立を欲せず、獨立の出來ぬものは、身體一つを提供し、勞力を差出して仕事に服するが故に資本がなくてもやれる。

今日世間で喧敷論議さるゝ資本勞力の對立は、餘りに資本を重く見る結果、人を離れて資本を見るからである。婚禮が虚禮に流る結果、人の本質を餘所にして道具に重きを置き、道具を見て娘を見ざるの類である。

農業を家業として生活し、商工業は勿論のこと、自轉車の修繕を家業として、下駄



の齒入れを家業とし、以て一身を支へ家族を扶養し、進むでは文明的の人とならむ心懸けのものは、資本なくしては出来ぬことである。獨立自營の家業には皆資本が必要であり、資本の援助がなければ、人に依らずして世に立つことは出来ぬのである。斯る場合の資本は、何等呪咀の的としたり、怨恨の標的はならぬ筈のものである。唯だ人は所有本能に能せられて、必要以上の資本を有つたり、有たむことに孜々乎として敢て無理をなすの弊がある。それ故に人に入用なる資本は、之を増加すべし、分配をよくして其普及することに心懸けねばならぬものである。

獨立自營に必要な資本を欠くは、それ故に氣の毒なものであるとする。農村に於て土地なき耕作者や、都市に於て商賣道具を持たぬ労働者は、社會の目醒めし人から同情を得るは當然のことである。唯だ官吏は公務に従事して報酬を受け、社會の尊敬をも受けて居る。それ故に同じく資本を有たぬものであれば、獨立自營の精神がない以上、公官吏をよいものとして、それにならんことに務むるは、亦無理でないとする。

る。

農村に於ける耕作者、都市に於ける労働者、會社に於ける雇傭人は、獨立自營の出来ぬ人である。所有慾を根底として考慮すれば、其慾望を充たし得ぬ人であり、充たさんと欲して得ざる人であるが故に氣の毒な人なりと云ひ得る。然し何れにしても一家を持つて居れば、其處に家業が出来ねばならず、出来さねばならぬのである。

僕は當初、獨立自營の人たらんと欲し、先づ農業を家業として立つべく、農科大學に入り、北海道にて農人生活をなさんと心懸けたが、親から借金があるのを聞き、當分其目的は果し得ぬと考へて、學校の教職につくこととした。身體さへ丈夫であれば教うることに事欠かすば、先以て勤めが出来ぬ。唯だ僕は奉公に燃え、奉仕に懸命でやつた。それ故に家庭は解放して、一身は社會へ捧げた。時間は地方に寄附した。有難月給を頂戴したが故に、月給の上ることを欲して頼んだり、ボーナスの多からんことを欲して上役の機嫌をとつた覺へはない。唯だ家族を督勵して、最初の目的に到達



せん準備をした、それは生活に無用の費をかけないで餘分を積むことにした事である。

僕の心得は幸に間違はなかつた、僕の勤務に對してつまらぬ非難はなかつた、僕の活動は多くの人に歡迎された。それ故に僕は久しからずして、借金の始末をなし兄弟や子供の處理もし、大正九年には長男の死去を紀念すべく、且つ準備行爲として、三重縣の石樂師村に四町歩の土地を買い、家屋も建てた。今では相應の地主であり、資本家であり、物持と勘定されても否定することは出来なくなつた。唯僕は世間から要求されて不相變東奔西走して寧日がない、爲めに農人生活に入るを得ぬ悲しみをして居るのである。

世には僕と同じ經路をたどつて居る人が多いと信じて居る、そう云ふ經路を踏まねばならぬ境遇の人は尠からずあるものと信じて居る。而して僕が當初に發念した様に獨立自營の人にならむ目的を立つるが多く、立てた人が多いと思ふ。而もなか／＼目

的は近いでも到達することが容易でなく、容易に彼岸に達することが出来ぬと僕の如く嘆息して居る者も世の中には相當にあること、信じて居るのである。

僕は獨立自營を好む、それを欲する、其處に終生の目的を置いて居る、而も勇志は尙衰へず、初一念は今もかはらず燃へて居る。僕の元氣、健在、奮闘は皆それから生れて來て居るのである。

斯くの如く僕は獨立自營を好愛し、要求し、讚美するが故に、何時までも獨立自營の氣がない人を物足らず思ふ。同時に微力を捧げて獨立自營の志を助け、其人にせむことに努めて居る。それ故に僕は今でも物ずきな男だ、との批評を耳にしながら満足をして居るのである。

要するに家業は人の境遇によりて變化する、時勢によりても變化する。然し出来るなら、資本を要する獨立自營の人にならねばならず、せねばならんと主張し念願するものである。此點に付ては、有餘る資本を擁して寢かして居るものや、資本を有ちな



がら獨立自營の家業を持たぬ人に深き考慮を要求せざるを得ぬのである。

斯く論じ來ると、此處で産業組合の利用を叫ばねばならぬこととなる。産業組合は資本に欠乏する人や資本なきもの、便利を與ふる唯一の機關であるが故に、何處でも之を設けねばならず、誰れでも之に加入すべきを慫慂するが、特に獨立自營を心がけ、其普遍を念願する者に然りとする。

### 三、生産に従事するものと、然らざるもの

前述の如く學者の説によると、生産に三つの方面がある、其一は新に生命を作り出すこと、其二は新に價值を作り出すこと、其三は新に効用を作り出すこと、といふのである。之になれば完全なる生産に従事するものは農業であつて、商工及之に類するものは、價值と効用との生産に過ぎぬとなる。然し孰れにしても、生産は物質を豊かにするものであれば、人の生活を幸福にするのである。されば出来る丈け生産を業とする家業を貴び、家業は生産業であるを欲するが至當とする。

然し僧侶も神主も、教員も軍人も世には存在の必要があるから、不生産業なりとて穴勝排斥すべきものとは限らない。場合によりては生産の原動力は此處に在ると云ふ點からして、此方面に働く人が寡る存在の意氣があるといふことにもなる。兎に角、今日までは斯く考へられ、斯く思はれた爲めであらう、生産業者よりも之等の人は社會的に高き地位に在り、社會人の尊敬を博して居つた。而も斯る人々は必ずしも多數を要せぬとのが分つて以來、生産者の地位は高められ來り、今日は彼我平等の地位に立つことになりて來たのは、世の推移とは云ひながら面白い現象であるとする。唯だ何時の時代でも、不生産的の人の中には正しからぬ業務をするものがあり、清き家業と認むることが出ぬ家業をなすものがあり、それが年を遂ふて増加する傾向のあるのは看過することの出来ぬことである。遊蕩を目的とするものや、盜傷を好むものや、詐僞を面白がるものや、乞食を便利なりとするものや、生血を吸ふことを樂みとするものや、其存在は他を毒し、損し、脅威するばかりなるがある。如斯は共力一



致、社會から葬り去ることにせねばならず、其發生をも末前に防ぐ手段を講せねばならぬとする。

要するに、汗をかかずして衣食し、働かずしてよい目に遇はんと欲する心情に制せらるゝ者が、一番困るのである。國家を認め、社會を直視し、民衆を思念しての業は生産業と不生産業とを問はず敢て論ずる所はない。唯だ生産に従事せんとする人の少き折、生産業を貴むで家業とす人の多いことを希ふは、恐らく人情であらうと信ずるのである。

今日の我帝國は物資の次乏が日一日と痛感される、物價は不景氣と反對で下りそうでもない、此場合は如何なる人でも、生産にいそしむことにせねばならぬとする。生産を家業とするものは其やり方を進めて生産能率を高めることに努力せねばならぬ利益に目がついたり、儲けに馳られたり、徒に經濟觀念に追はれては、本當の生産は出来るものでないと僕は敢て高唱する。

繰りかへして云ふ、生産業にいそしむことは時代柄貴い、生産業を家業として居る人々へは好意を表せずには居れない。僕は生産業と不生産業との優劣や尊卑は分たむが出来ぬ丈け生産業を家業とせんことを、衷心から祈つてやまないものである、特に青年諸君の考慮を煩はしたい。

#### 四、無職は恥辱である

人には一定の務めがあり、一家には常の職業がなければならぬものである。人は其務によりて人生の意義を發揚することが出来、其務を通じて人の役目を果し得るのであり、一家職業によりて其存在が明かになり、其職業を通じて國家社會に貢献することが出来るのである。それ故に無職の人や家は存在の價値はなく、従つて人生の恥辱であり、社會の面目潰しである。

#### 五、職業と公私の別

職業には公私の別があり、昔は其處に嚴然たる差別を劃したものが、今日はそれ



が徹廢された。然し久しい習慣や傳統によつて、今尙其處に差別を設けて居るものもあるが、それは時弊と見ねばならぬとする。即ち公務を貴とし、私務を賤しとするところが、それである。公私といふ以上、公と私とは區別するが當然である。其處に輕重はあるも、貴賤の別はない。従つて差別を設くべきではない。誰だ、如何なる場合でも、我大和民族は、天皇に歸一することを先にせねばならぬ。國家社會に貢献することを重しとせねばならぬ。私のために公を廢し、私利のために公益を犠牲にしてはならぬのである。それ故に官公吏は、何處までも清廉潔白で、奉公の誠を輸たすべきであり、農工商の民は、忠實業に服して義勇公に報する覺悟がなければならぬのである。

#### 六、公に務むる人の心得

公に務むる人及其家族は、何處までも奉公の心得がなければならぬ。文明人が尤も貴しとする自由を犠牲にして、以て一身一家を國家社會に捧ぐる所に官公吏の權威が

あり、面目があるのである。それ故に官公吏及其家族は、飽くまでも犠牲的であり、奉仕的であらねばならぬ。其位に驕り、其務を奢り、民衆を睥睨するは、官公吏や其家族の態度では斷じてないのである。

#### 七、私の業にいそしむ人の心得

私の業にいそしむ人は、其家族と共に、常に自己の職業を通じて、國運の發展、民族の繁榮に貢献する覺悟がなければならぬ。實業に服する人こそ、眞の自由民であり自由意志によりて自由の行動が出来る境遇の人である。其處に實業家の權威があり、面目もあるのである。それ故に實業家及其家族は、自由の天地に活動し得ることに喜悅をなし、其家業に精進することが出来ねばならぬ。徒に己を卑下し自ら悔るの愚をなすべきでないのである。

僕は士族生れであり、僕の家内も同様である。士族は當時奉公大事に訓練され、常に身命をなげ出す覺悟が出来る様教育されて居つた。それ故に、士風は眞摯であり、



質實であり、勤勉であり、愛情に富むものであつた。僕が始めて任を學校職員に奉ずるや、職務に忠實であると同時に、人に迷惑をかけてはならぬ。公務に成績を上ぐると同時に、齋家の範を示さねばならぬと覺悟した。學問の教授で職責を果たす考では駄目だ、人格の感化を興ふることが出来ねばならぬ、それは學校内でのみならず、學校外に於ても同様であらねばならぬ。僕獨りそれが出来ても駄目だ。家族全體が其通り出来ねばならぬと考へて、僕は親子、夫婦、兄弟、相戒しめて、以て今日に及んで居る。身を修めても家を齊ふることを得ず、人格の光りは認め得るも、それは家族に及ぶ能はずして、或は虚榮の妻にあやまられ、或は不幸の子に苦しめられ、或は家庭の不和によりて四圍に迷惑をかくるもの世に少しとせず、之等は官公吏の面目を傷付け其價値を喪ふものとすべく、寧ろ慙然たるものである。

今の僕は、全く自由の天地に活歩して居る。心に何の束縛も感せず、身に何の干渉をも受けず、同時に命令するものもない。故に官公吏を見れば、御苦勞に見へ、氣の

毒にも思はれ、情なくも感ずる。斯くの如くして自己の難有さを思へば、感謝の生活をせぬでは居られなくなる。歡喜の日暮をしない譯には行かなくなる。全く、僕の今日の生活は、感謝に充ち、歡喜に満ちて居るのである。それは、僕獨りばかりでなく僕の家族は皆同じである。此の考察は、實業家の人に来てねばならぬ筈であり、此の生活は民間の人に見られねばならぬものである。而も、或は自己の業務に愛憎をつかして愚痴の日暮らしをなし、或は己の職業を侮つて卑下するものもある。情ないことであり、氣の毒なことである。

#### 八、共存同榮の大義に目醒めよ

勞働によりて身を立て、家を齊ふるものは、年を追ふて増加する。既に自己の資本で獨立する能はずして、他によるは、資本あるも勞力足らずして獨立する能はざるものと、同位置に居るものである。資本と勞力と、孰れが貴いかは論議あるも、僕は平等であると見るが正當なりと斷ずる。それ故にそれ等の人々は共存同榮の大義に目醒



めて、互に助け合ふことに努めねばならぬ。其處に自覺のない限り出來ない以上は、社會は決して安寧とならず、國家も亦平和を招來すべきでない。其處に政治の新らしい方面があり、政策の進展があるのである。

今日の社會は、一面に無職の徒が殖へ、一面に失業者が増加する、共に國家の禍である。官公吏にして恩給にあり付いたもので、職をやめられしもの、又はやめたものは、氣がないもの、腕のないもの、世話のしてのないものは、多くは徒食の民となり恩給丈けでは喰へぬといふものは、恩給の増額運動を仕事として居るもある。それが爲めに、國家に及ぼす迷惑も、民衆に及ぼす悪影響も顧慮する暇がない様である。老衰事をなすに堪へぬものや、病弱業をとる能はざるものは別であるが、働き得らるゝものが働に倦み、勞働を敢てする能はざるは、困つた事であり、情ない人である。

#### 九、汗なき社會は墮落である

徒に人口の増加のみがはげしくなり、職業が殖へぬでは、就職難が到來し、失業者

が出来るは無理からぬことでもあるが、今日の失業者の多くは、地位や待遇を望むがために就職難に陥るものが多い、それは知識階級に多い。賃銀の高きを望み、骨の折れの仕事を選む爲めに失業者であるもある、それは勞働者に多いとする。眞に働かんとするもの、働くことを主義として求むる所があれば、仕事は何處にもあり、なす業の絶へずあるが世の中である。

如何なる職業でも、働くことを覺悟せねばならず、家業には精勤することに腹をきめねばならぬが、業務に對する先決的信條である。業は勤によりて精、怠によりて荒む、と古人は戒めて居るが、古今一貫の眞理である。それ故に汗なき社會は墮落の社會であり勤勞の民風なき國家は亡國の運命を見ねばならぬのである。

#### ◇ 家業と「勤」

勤勞には巧拙があり、働くには上手下手があるものである以上、誰れでも巧みに勤



勞し、上手に働く心懸が大切である。それ故に、僕は、勤とは、體力、智力、徳力、意力が一の仕事に集中することであると説いて居る。即ち人は達者である故に如何なる難事にも堪へ得る、智慧がある爲めに如何なる難局をも打開する、信用厚きが爲めに、誰れでも言ふことを聞いて呉れる、意志強き故に必ずやり遂げると云ふことにならねば、勤の功徳は顯はれまいと信ずる。故に健康第一義を唱へ、學問の必要を力説し、人格修養の肝要を説き、強固なる意志の養成を主張するものである。

更に公私を論せず、職業に従事するもの、家業の衡に當るもの、みが、職業を理解し、家業を辨へて居る丈けでは駄目である。家族の凡てがそれを理解し、それを辨へて、或は激勵し合ひ、或は助け合ひ、或は共力し合ふことが、能率を上げ事功をあぐるに尤も必要であるとする、茲處にも最も大なる内助を與ふるものは妻たる婦人である、内顧の憂をなからしめて、職業に勇往せしむるも婦人の力であり、男子をして醜怪の行爲を取行せしめ以て一生を暗からしむるも亦婦人の力である。又たよく監督し

指導し激勵し、職責を果たさしむるに尤も力あるものは、母なる人である。世に良妻賢母を唱讃する、豈に偶然ならむやである。

◇職業を仇敵と見よ

世には職業や家業を以て、身を立て家を興し、同時に國家社會に貢獻し得るものとするものがある、それ故にそれ等は立派な味方であり、寶であると解釋する。然し、僕は職業を以て敵なりと見、家業を以て仇なりと考ふるがよいとする。何んとなれば用心を缺き、工夫を怠り、經營に進展を計らねば、職業は身を過らしめ、家業は身を亡ぼすことになるのである。官公吏にして往々其職務を利用して醜怪のことをなし、以て社會より葬られるものがあり、實業家にして失敗の極、命を縮めるものが此處彼處にあるではないか、されば、職業により成名し、家業によりて成功を期するには、それ等を仇敵と見做して油斷せぬことが賢明なりとする。

又た、世の中は常に變化しつゝあり、變化するが世の中である。而も向上性が賦與



されたる人の社會は進歩し、向上するが常である。それ故に職業に従事し家業にいそしむ者は、何處までも、變化に順應すべく、進歩に追進の覺悟と努力とを輸さねばならぬのである。然らざれば、或は自己の職業に信念がなくなり、或は自己の家業を輕侮するの愚に陥るのである。今日、農村の人が動もすれば、農業を經濟的に不利と解釋し、文化的には農村生活に文化なしと考へたりするのは、時勢に順應、追進の覺悟と努力とを缺いて居るからである。又た都會の商工の人が、不景氣を愚痴の種にし、それを呪咀するも亦然りである。何時でも、何處でも、懈怠の前には面白い世界は展開せず、頑愚の前には愉快な世の中は來ないものである。

#### ◇家業と信念

如何なる職業に従ふものも、如何なる家業に服する者も、前途には理想が明かでないければならぬ。常時には強い信念がなければならぬ。理想がなければ改良も出來ず、擴張も出來ず、進歩も出來ぬことになる。信念がなくなれば、困難に堪へ、失敗に甦る

ことも出來ぬ筈である。我國の業務に従事するもの、通弊は業務に對する理想と信念とを缺き、突如として襲來する事故に囚はれ或は環境の變化に指揮され、或は其日暮らしの状態に居るもの、多いことである。理想があればこそ、其實現に努力する、斯くして、或は研究し、工夫し、調査し、視察し、考察し、試験し遂に進展の道を見出すことが出来る。而も頭から和尚にはなれぬが道理である以上必ず時日を要し、歲月を経ねばならぬ、其間には意外な邪間が來り、困難が生じ、時に或は失敗に陥ることもある、それに堪へ、忍び、勇氣百倍して、遂に理想を實現せしむるは、一に信念の力である。

信念は主義によりて養はれ、信仰によりて強められ、人生觀によりて成立が出来るものである。それ故に、修養は大切であつてせねばならず、宗教の門に入ることも肝要であつて堂に上る心懸も亦あらねばならぬことであり、人生に透徹して觀念を新にする工夫も大切であり、それに努めねばならぬとする。今の人、其處に考慮せず、思



を練らずして徒に職業を追い、家業に従ふ。行き詰りを感ずる。豈に偶然ならむやである。新に職業を得しもの、得んとするものは、其處に悟らなくてはならず、若い人達にして、家業を相續せしもの、手傳ふもの亦此悟りを開くべきである。

#### ◇職業の選擇

職業の選擇は人生の一大事である、何んとなればそれによりて人の運命が定まり、人生の意義も得らるゝことになるからである。公務に従事し、官業につくものは、須らく自己の貴い自由を捧げての奉公振りをせねばならず。私業に従事するものは、文明人の誇りとする自由の天地に活動する歡喜の働き、感謝の生活が出来ねばならぬとする。

月給取は、収入の一定して所長所もあり短所も亦ある。實業家は収入の未定なる所に憂ふべき所もあれば喜ぶべき所もある。其處に輕重の差別もなく、善惡の區別もない。唯だ文明人は、何物よりも自由を貴び、自由を愛し、自由を憧憬する、其貴

い愛する憧憬する自由を犠牲にして、以て奉仕の職務に従事する所に敬意を表して、官公吏を貴いものとする。而も經濟的に恵まれ難いものであるのに同情して、官公吏優遇論が起つて來るのである。それ故に經濟的にも社會的にも自由の立場にある實業家は何處までも、自由の地位にあるを喜むで、感謝の活動をせねばならぬとする。感謝の前には、不平も起らず、愚痴も出ず、怨嗟もなければ、呪咀もない、従つて愉快な生活が出来る。僕は、斯く説き來り、説き去りて、農業も尤もよい職業であるとする。米國を建設したジョージ・ワシントン氏は、

凡ての職業中最も貴い最も大切な最も趣味ある職業は農業である  
と體驗よりして説破して居るが、それは何時でも何處でも間違ひのないことであり、信條であることを斷言するものである。

今は昔も昔、三千年前の支那は堯の天下の下に働いて居つた農民は、  
日出て、耕し日入つて息び、田を植へて食ひ井を鑿つて飲む、帝の力もそれこれを



如何にせんや

と歌つたと云ふが、農民の意義は斯くあらねばならず、又た斯くあるのは當然である。天下職業多しと雖ども、此氣煙を吐き得るもの何處にありや、此誇りを有するもの他にありや。農民は此見識に生くべきであり此見識に生き得らるゝ唯一の人である。此抱負にて進むべきであり、それが出来るが農民の面目であるのである。

◇偉人と農業

南洲翁は野に下れば、鹿兒島市外の吉野村で農民生活をした。乃木大將は退役して那須野原で三町歩の自作百姓をやつた。トルストイは伯爵を投げ棄て、農民生活に入り、出世したと喜むだ。偉人は何故に農業をやるであらうか、豪傑は何の爲めに農民生活をするであらうか。恐れ多い話ではあるが、我皇室にをかせられては、一切の實業はをやりにならぬ唯だ農業のみはやつて居らるゝ、それは何故であるであらうか。農業は生命を生産する業であり正直でなければならず、質實であり、それに必要な

生活資料を生産する事にいそしむものであれば、虚偽や虚榮を許さぬのである。其處に貴い所があり、偉い所があり大なるものがあるばかりである。

今日の世は進むだと云ふが、徒らに形式を見て無形に察することが出来ず、物質を追ふて精神を見る能はざるの弊がある。舉世滔々乎として其弊に陥り、其弊に囚はるゝは、實に聖代の恨事である。僕は、農界の人であるが故に、動もすれば我田引水の説をなすものとするもあらうが、僕は斷じて斯る愚をなすものではない。重農は彌榮の國家に必ず見らるべきことであり、尊農は國家を建設する偉人の思想に付て何時でも見らるゝことであるのである。

一時は國民の過半を占めて居つた農民は、不幸にして自己の職業を理解すること能はざりしと、一面社會の變化に壓迫されて、今や多くは迷惑の民と化した。而も國の政策はこれを考慮せず、世の識者亦其處に注意せず、爲めに農民は益々其迷を深くし惑は甚だしくして、今や農村に落付かすなり、農業に執着することが出来ぬ勢は、流



をなし、風をなすに至つたことは、誠に情ないことである。

論ずるもの比較的ひかくてきに少く、指導しどうするもの多からざるに鑑みて家業論に於て農業のみを説くは偏頗へんぱの嫌なきにあらずと雖も、敢て農業に付て、更に説を進めんと欲す、之れ、僕が農民に對する同情どうじやうの然らしむる所、又た黙々として土に親しむ人もあるを見て感謝かんしゃの念にからるゝ所以であるを諒解りやうかいされて許されむことを祈る。

#### ◇家業經營の三勤

如何なる家業かげふでも（敢て家業と云はず人の務に對しても亦同じ）心得べきことが澤山あり、守るべきことが色々あり、學ぶべきことが多々あるのであるが、僕は特に三勤論さんきんろんを主唱しゅちやうして居る、三勤とは如何曰く精勤、曰く賢勤、曰く耐勤、心得べきも之れであり、守るべきも之れであり、學むで向上かうじやうすべきも亦之れであるとする。以下、三勤に付て聊か解説かいせつすることにする。

#### 一、精勤

之れに付ては前章に之を述べたことがあるが、更に説いて見たいのは、今の代に勞働忌避らうどうきひの思想しきうが餘りに流行し、爲めに懈怠けいたいの民風を見、懶惰らんだの俗を招來しつゝあるからである。昔は聞くべくもあらずであつた、サボルてふ言葉が新に出來たのは蓋し周知の事實である。

世に危険思想けいけんしきうといふがあり、之を恐るゝ人もあるが、之れには取締りの法がある、それ故に芽にして切られ、根をも掘り取る術もあるが、勞働忌避らうどうきひの思想しきうに對しては取締法がない。それ故に何處までも流布し、何人の腹の中へも入りつゝある。今や純眞なる農村の人々も此思想しきうに囚はれて、なるべく働かないで儲かる様、骨を折らぬでよい目に出遭であひ度と考ふるものが生じ、それが滔々たうたう乎として勢をなしつゝある。又た犠牲的の奉仕をなすべき官公吏の間にも之れが流行して、随分サボルものがあることになりつゝある。教化を民衆に垂れ、儀表的の忠勤をなすべき教育家宗教家にも、之れが感染して醜みにくき運動をなすもある。



今の時代は、勞働するものを認め、勞働するものに力を増大し、勞働するものゝ位置を高めつゝあるに徴せば、何人も勞働の功德に悟らねばならぬ筈である。死ぬだものが働いた例なきを思へば、如何に飯を食はふが働かぬものは死人同様と見ることが出来、同時に生に目醒め、生を意識するものは働かすには居れない筈である。社會相を見て、人生觀よりしても、働くことを敢てし。勞働を尊重し、精勤主義になるが文明人の面目であり、文化人の權威であらねばならぬのである。

興隆の亞米利加合衆國民は、掌の大なるを誇りとした、勃興の丁抹國民は掌の固きを誇りとしたとあるが、大なる掌、固き掌は獨り勞働を敢てする人へのみ與へらるゝのである。指の細い女の手、手の麗はしき女は、人を迷はしめ、男を陥れるものがあり、指の節高き、手のあれたる女は、よく人を助け、男を激勵すと、古から言傳へられて居るが、之れは間違はぬことである。

人を使ふに己れ働かず、人の働きの上まへをはねて偉いとせしは、野蠻の特徴であ

り、遺風である。人は働きによりて生存の意義が明かになり、人は働いて時代を改造するが故に萬物の靈長たり得るのである。働かぬ人の活動は、所謂走屍行肉である。

人類の權威を損ふものである。此處に目醒めば何人も働き得ることになり。人一倍働かねばならぬことになるであらう、これ僕が精勤を主張する所以である。

世には、よく働く人がある。何の爲めに働くかと問へば、或は働かねば喰へぬと云ひ或は儲からぬと云ふ。之等は、喰へることになれば必ず働かぬ人になり、儲かれば働かぬことになる人である。精勤は斯る人に望むべきでなく、見ることの出来ぬものである。精勤は、主義か、信仰か、人生觀によつて始めて出来るものである。少くも働き得らるゝことを喜び、人一倍働き得らるゝ所に満足し、働けば働く程難有いと思ふ觀念が生ずる様にならねば、精勤の人にはなれぬのである。故に、僕は勞働時間を短縮して、賃銀の値上げを要求するものには賛成せぬものである。己れの務めを怠りて其損害を地主に要求するものには同意を敢てせぬものである。



全く、一家でも、一町村でも、精勤主義によつて救はる。故に我國の現状打開も、亦國民が精勤に慳生することによつてのみ出來るとする。之れ、特に僕が精勤を鼓吹する所以である。

## 二、賢 勤

人は神でもなく、又た佛でもない。それ故に如何に精勤を主義とするも、精勤に徹底すると雖ども働き損の疲れ儲けがついたり、傘屋の小僧ではないが、骨折つて叱られるが如き結果がつゞけば、動もすれば精勤に愛憎をつかし、精勤に飽きを生じ、爲めに精勤がにぶることになる。世に其例は枚擧するに堪へぬ程あり、精勤の人の惱みは全く其處にあるのである。之れ賢勤を提唱し、主張する所以である。

賢勤は、能率増進を確實にする勤め方であり、働き甲斐のある働きをすることであり、骨折りに報ひらるゝことが必ずあることである。之れには仕事の本質を辨へることも大切であり、仕事に熟練することも大切であるが、日進月歩の學理を應用し、古

今一貫の倫理を應用し、加ふるに文明の利器と認めらるゝ、進むだる方法、機械の力を利用することにせねばならぬのである。

人、動もすれば、之れは問學の徒でなければ出來ぬとするもあるが、之れは誤解認見である。今日は單に當年の如く記憶力をのみ尊重せず、注意力、考察力、決定力を重要視することになつた。學校へ出ぬでも卒業證書を持たぬでも、よく注意することが出來、現象事物に考察研究が出來、最後の認定決定を下し得る人であれば、男女、老幼を論せず、發見發明も出來るのである。在學中不成績で放校されんとしたニュートンは、林檎の木から落つる現象に注意し、考察推理の結果、引力と決定して大發明をしたのである。我農界に於て、米で云へば神力種、鶏で云へば名古屋コーチン、西瓜で云へば大和西瓜、大根で云へば方領、宮重といへば全國的に知られ認められてる良品種であるが、之れは目に一丁字のない百姓が見出したものである。それ故に賢勤は必ずしも學問の徒に限つたものでない、教育のあるものに限られたものでもないこ



とを周知せしむることが必要である。自暴自棄は賢勤の敵であり、自悔は賢勤の仇であるのである。

唯だ、よく今日の學理を知り、之れが應用に巧みなれば、餘計な心配をせぬことになり、下らぬ手数をかけずに済み、餘分の時間を費さぬことになり無駄な費をかけぬでよいことになる。賢勤は、全く精神、肉體、時間、費用を節約して、効果と成績とをよりよくすることである。

今日は學理應用に急なるためか、時として倫理の應用を粗にする傾向がある。即ち愛護保護を親切にすること可愛がつてやることが抜けて、思はぬ失敗を招くものが随分多い。大正十五年の米の産額は一回の豫想が裏切られて、第二回の報告は二百六十万石の減收となつた。之れは種々の原因もあるが、浮塵子にやられた損失が多いとせられて居る。之は、蚤に喰はれての苦痛感を、動植物に及ばさぬからである。學理を知らぬでも、親切をつくす百姓、學理應用を辨へぬでも動植物に同情する農夫には知

らすくの裡に、學理に適ふたことが出来、應用も出来ることになるものである。

世が進むで著しく開られて来るは、方法手段である。金の融通には銀行が出来、信用組合が出来て来る、物の購買には共同購入が工夫され購買組合や消費組合が出来て来る。販賣には共同販賣や販賣組合や、市場や、出荷組合などが出来て来る。一人でやつて損な場合、一人で到底出来ぬことは、利用組合で解決されることになつて来る。保管の出来ないものには倉庫が出来、其利用が自由になつて来る。其他病虫害の豫防驅除法も、進むで来るばかりである。

近時農村に於ては、農業の經營改善に目醒めつゝある。其處に目醒めた者は、狭き耕地より多くの收入を上ぐる工夫と勞力の分配をよくして閑を出來さぬ工夫をして、所謂農業の組織化複雑化に努めそれをするには、農會、産業組合、農業倉庫、實行組合を巧みに利用して、經營の共同化に努めるのである。全く、農業に組織を立てること、共同經營にすることは農業の經營を改善する秘訣であり、行きつまれる農業を



進展する唯一の道である。

日本に於ける丁抹と評判さるゝ愛知縣碧海郡の農村は、多角形（現在多くは六角形）農業となり、米、繭、卵及西瓜は十六ヶ町村が共同販賣をすることになつた。尙肥料と飼料とは、共同購入をなし、配合をもやるのである。之れ等は、農會と産業組合及農業倉庫の協力による活動の賜である。

我國の農業經營には、改善上大なる餘地がある。故に前途は多望であり、多幸でもある。前途を悲觀するものは、方法手段に氣がつかぬものであり。行詰りを嘆ずるものは、智慧の行詰りと悟るべきである。又た、農村の痼症となりつゝある小作爭議を解決する道も、農業の經營改善に目醒めて始めて出来るとする。今は、小作法の制定に際し、地主や小作者は騒ぎつゝあるも、法によつて解決さるゝものでない。感情を去りて理性に生きることになり、共に經營の改善に協力するを得ば、昨の仇敵は、今は味方となり、共に明るい光明に浴することが出来るのである。

( 120 )

尙我國の農業經營に付ては、勞力の節約と、生産費の遞減と、販路の擴張とは、一日も忽緒に附すべからざることである。之れは、一は産業組合の活用によるのと、一は蓄力機械力の利用に待つべきである。之れ故に農業經營に目醒めし所程、近時産業組合の活動が顯著となり、動物の飼育利用が盛になり、機械を用ゐることが著しく目立つて来る、動物を飼ふて肥料の自給をはかり、勞力の補給を得るは、正に急務とすべきである。更に出来るだけ機械を利用して、農業の組織化に工夫するも、亦今日の急務である。販賣に付ては、農産物の商品化が必要であり、之れには、纏めること、揃へること、輸送上の保證を與ふること、保管の安全を期することが條件であり、品質を優良にすることは、如何なる物に對しても大切であるは勿論である。之れ等の行為が遺憾なく出来てこそ所謂賢勤となるのであるが、之れは産業組合と農業倉庫と農會の活動によりて始めて出来る。

( 121 )



耐勤とは辛棒強く、根氣強く、なさんと欲せしことをやり通す、やりかけたことはやり上ぐる人の努力を云ふのである。精勤は大切なるも、耐勤を伴はざれば功果は少くなる。賢勤も必要なれど、耐勤なかりせば、功德は上がらぬことになる。それ故に最後の勝利は耐勤に歸し、目的の成就は耐勤による。我國民の通弊は耐勤を缺くことであり、耐勤に訓練されざることである。

耐勤は理想信念の確立に基くものであり、之れが確固なればなる程耐勤は出来る。若し理想が低く、信念が弱ければ、或は途中で挫折し、或は中止の已むなきことになる。それ故に、何事を計畫し、實行するにも、理想は遠大にして高かるべく、信念は強固なるを要するのである。

近時、農村振興が唱導され、其對策は種々論議されつゝありと雖も、而も振興の事實を容易に見る能はざるは、農村の人をして理想信念に生かしむることが出来ぬからである。都市には、今や都市計畫法が實施されて、將來改善されべきことは、如何な

る市民にも豫想されるるのである。其處に市民は色々の理想を畫き得るのであり、法の力が背景であるが故に、早晚出来るものとの信念をも持つことが出来る。然るに、農村に對する振興の聲は高しと雖も、それは聲であつて法ではない。出来つゝある對策に徴しても、枝葉末節に流るゝものか、然らざれば不徹底と認め、物足らぬ感じがするものばかりである。それ故に、農村の人には前途に對する理想が容易に畫かれず従つて振興に對する信念も出来難いのは蓋し無理からぬことである。加ふるに、財力の人、智力の人、體力の人は、離村を敢てして市民生活をなすもの滔々乎として流をなすが故に、理想信念に對する指導を缺くことにもなる。故に多くの農村に於ては、理想を追ふ若い人達は、或は都會熱に浮かされたり、或は田園退却を敢てするものが風をなして居るのである。斯くの如くして、農村振興の實現を見んとするは、或は木に昇りて魚を求むるものではあるまいか。

農業の經營が容易に進まず、改善が直に行はれざるも、亦之れに對する理想信念を



缺くからであり、之れに對する指導誘掖が足らぬからである。近時若い人達の間に、農業經營に一生面を開くものがある。之れ等は、皆理想を確實に立て、強い信念に生きるものである。それ故に、理想は人を勇氣づけ、信念は人を偉大ならしむるものとする。

近時、我國の教育は、生活程度の向上につれて、軟化する傾向がある。之れは家庭教育に於て、學校教育に於て甚だしきを感じる。艱難汝を玉にす、といふ格言は、今でも人を欺かぬものである。肩脊を傷けざれば善賢となる能はず、糞水を掬せざれば善賢となる能はず、死地を踏まざれば喜士となる能はざるも、亦古今一貫の眞理である。而も、困難を味はさせて意志を練り、苦辛によりて氣魂を鍛鍊する教育は、今や跡を絶たんとして居る、其理想とする所は、俸給や待遇のよい所に出世せんとし、樂な仕事に従事して甘いものでも喰へる所を要望するにある。子も左様であれば親も左様であり、教ゆるものも左様であり教を受くるものも亦左様であるが、今の流行であ

る。人物の出来ぬのも人物のないのも、無理からぬことではないか。斯くの如くして耐勤を見んとするは、黄河の澄むを待つが如しとする。

なせばなる なさねばならず 何事も

ならぬといふは なさぬなりけり

との古い教訓がある。全く其通りであるとする。唯だなすべきことは擇ばねばならずやるべきことは選ばねばならぬが既に之れが善い事であり、正しきことであり、必要のことであり、且つ之れが己が力によりてなし得るものであれば、如何なる故障が起らうと、邪間が入つて来ようと、困難が襲ふて来ようと、理想の實現まではこぎつけねばならず、目的の達成までは敢行せねばならず、希望の充たされるまでは貫行せねばならぬのである。出来ると信する所に忍ぶことが出来、なし得ると信する所に耐ゆることも出来到達が出来ると信する所に我慢勤忍も出来るのである。それ故に、己の力をはからずして、徒らに元氣に驅られてやることや、人の擬似してやることは、多



くは空想になる。空想は人を失望せしめ、悲嘆せしめ、悲觀せしむるが故に、陷るは排斥すべきであり、空想に耽るは矯正すべきであり、空想を抱くものは教へて之れを去らしむるが肝要である。

理想信念に生くる能はざる人の一生は

たゞうかゞと二十年

あれやこれやと二十年

これはくゞと二十年

徒に時日が経過して六十の歳を迎へ後悔するも及ばぬことになる。斯る徒は、所謂醉生夢死であつて、人生觀を傷つけ、人類の面目潰しである。而も今日、我國の通弊は、斯る徒輩の多いことであり、多くなることである。然らざれば、苦しむ結果、人を奪ひ、人を掠めんとするものが跳梁横行することである。淺間しき世相、情ない社會現象は、如斯して展開しつゝあるのである。此現状打開は今日の急務であり志士仁

人の正に努力すべきことである。之に付て、僕は三遠主義を高唱し、若い人達の指導をやつて居るものである。所謂三遠主義とは如何、曰く

一、想は高遠

二、識は深遠

三、行は宏遠

といふのである。即ち思想は高尚であつて遠き將來を想ふことが出来ねばならず、智識は奥深くして遠き未來をも知ることが出来ねばならず、行は功徳を衆に及ぼし遠き將來にまで残すものでなければならぬといふのである。斯る主義を抱持して居れば、此主義に生くることが出来れば、輕ろがろしく事を始めぬ代はりに、やり出せばやり通さねばならぬことになり、出足は後れても、必ず目的に到達するまで進行することが出来るとである。耐勤の出来ぬは、一に思慮分別の足らぬに基き、計畫用意を缺くに因るも亦多いのである。想と識とは人の行爲を指揮し理想信念亦人の行爲を制するものなる事は、今の我國民の辨へねばならぬことであるとす。

世に精勤の人はある、然し賢き勤めをするものは少い、耐勤に至つては更に少い感



がする。世は開け、人智は進むと雖ども、耐勤の用意が足らず、その訓練をなさざるは、我國民の缺點であり弱點でもあるとする。人往々氣候風土が然らしむることもあり、大山國の特徴とするもあるが、如斯觀念し去るべき問題ではない、矯正すれば矯正が出来改善すれば改善が出来ることである。吾も人も共に心をいたし力をいたすべきは正に此處にありとする。

## ハ 家業に對する心得

### ◇職業は利刀の如し

繰りかへして説いた様に、家業は家に與へられた務であり、それによりて生計の資を得るのであり、それを通じて國家社會に貢獻することが出来るのであるから、家にとりても人にとりても、最も大切なことであり、大事なものである。

公私の別はあつても、大小の差はあつても、巧拙があつてはならぬものである。而

も巧拙があり勝ちであり、上手下手が生じ易きものであるから、其處に周到なる用意と不斷の努力とを輸すべきである。同じ職業でも、巧者であり、上手に出来れば、如何なる人でもよい職業と思ひ、難有い心持も生ずるが、拙であり、下手であつて、面白くやれぬと、其職業にいや氣が生じ、果ては呪ふ様にもなるが常である。職業に善悪あるもの、如く考へて、己れに反省せぬが、人々にあり勝ちな缺點である。

近來、農業を忌避するものが、農村では滔々乎として勢をなして居る。それは、時勢に順應した經營が出来ぬ爲めであつて、農業の罪ではないのである。理窟から云へば、天地の力に合はせて人の力を盡くす爲めに生産が出来る、故に天と地と人とに生産が三分されねばならぬのに、人は凡てを收穫する。故に農業ほど結構なものはなく難有いものもなく、甘いものもない筈である。此處に氣が付いてる農人は、天徳地徳をたへて知恩報徳を叫び、我が德行をつくすべしとするは偶然ではないのである。眞の農人は斯くあらねばならず、斯くあるが目醒めた農業者であるのである。



毎日やつて居るが家業であり、手慣れた仕事が家業であるが故に、知つて居るが如く思ひ、分つて居るが如く考へ、辨へて居るが如く察するは、萬人に通ずる弊である。燈臺下暗しの諺の如く、慣れてる仕事が反つて分らぬものであることに気がつかねば自己の職業の改良改善ははかれぬものである。改良改善をはからぬでは、自己の職業は自己を救ひ、助くるものとならず、反對に自己を苦しめ、窮乏に陥る仇敵ともなる世の中には、其例は枚擧に暇あらずである。

古人は、己が職業を仇敵と思ひ油断すな、と教へて居るが全く其通りである。或は職業は利刀の如し、よく使へば亂麻を斷つも、之を誤れば自己を殺す、と之亦眞理である。それ故に家業は其經營を賢くし、敏くし、以て遺漏なきを期すべきである。

◇道中衣食あり

家族の分擔よりせば、家業に主としてあたるときは男子である。公務に服するものは勿論のこと、實業家に於ても家業の經營に責任あるは男子である。例外は勿論なる

も男子の性質は勤勞行するに適して居るのである。それ故に男子は家業に周到なる用意をなし、緻密なる計畫をなし、よく時勢を考察して順應の心得あるを要する。特に農家に於ては、外の仕事は男子に好適して居るが多い丈、それ丈、農業の經營に付ては男子の責務を大なりとする。

職なきは、人の面目でない。業なくては人生の意義を全ふることが出来ぬ。此意味に於て、家業を經營すべきであるが故に、利を追ひ、名に驅られてはならぬのである。忠實服業には必ず報ひらるゝものがある。勤勉業に従へば與へらるゝものが多いのは、理法である。此處に意を安んじ、心を落付て従事すべきが家業である。古語に道中衣食あり、衣食中道なし、とあるが、至當であり、眞理である。迷ふてはならず惑ふてはならず、疑つてはならぬのである。

成程、世の中には失業者が居り、それが増加の勢を示すが故に、今や授職の道を講じ、就業の方法を探るが、社會政策でも特に大切なことになつて來た。然しそれは求



むるものを前にし報ひらるゝものを主とするからであつて、働くことを前にし、勤勞を主とするならば、職は至る所にあり、業は何處にでもあり、従つて衣食に困るものではないのである。現に奉仕生活をやつてる一燈園の連中は、立派に衣食を得て居るではないか。それ故に、徒に物質的の社會政策を講ずるのみにて、精神的に考慮し措置するを努めないでは、遂に自他共に苦しむことになると思ふ。

世に心からとは云へ、失業に苦しむで居るものがあれば、家業を有つてる者は喜ばねばならぬ。爲めに人の面目を傷めることなく、人生の意義を全ふすることが出来ると思へば、其處に歡喜の念が起らねばならぬ筈である。歡喜の念を以て家業に當たれば、それを輕侮したり、それを疑ふたり、それを忌避したり、呪咀することは出来ぬ筈である。そうすまいと思へば、研究、調査、聽聞、視察、試験をくりかへして、家業の改良と向上と發展とをはからずに居れぬことになる。斯くして、何人も家業に安んじ、樂しむで行けることになる、古人の所謂、安職而忘利、樂業而忘名の境界に立

つことも出来るのである。

◇得んとせば先づ與へよ

それ故に、一家を主宰するものは、家業を理解するのは勿論、家族をしてよく家業の理解をなさしめ、又は家業の分擔をし、各其分擔に努めしめ、以て面白く、安穩に歡善の生活が出来る様にすべきである、其處に、一家の幸福が招來され、繁昌が醸成され、彌榮が實現する。之れ齊家の大道であり、大法である。

古諺に、得んと欲せば與へよ、とあるが、之亦齊家の心得であり、處世の秘訣でもある。家業によりて、収入を得、所得を上げむとする以上、何人も先づ己が最善の心と力とをそれに輸すが先決問題である。それ故に、今日流行する勞働忌避を敢てするものや、それに驅らるゝものは、求めて収入の道に遠ざかり、勤めて所得の藏から隔らんとするものであつて、至愚の沙汰であるとする。而も、人智開らけ、世は進むと雖も、此道理が分らずなり、勞働忌避の思想に驅られ、それを敢てするもの、滔々乎と



して流をなし風をなしつゝあるは、不思議であり、奇怪のことである。

きりむすぶ 刃の下は 地獄なり

ふみ込みてこそ 極樂もあれ

とは何んぞ必ずしも武道の心得であるのみならむやで 家業に對しても、職業に對しても、其覺悟を要するのである。思切つて働けばよい、黙つて人一倍の勤勞をすればよい、毅然として流汗の努力をすればよいのである。戒しむべきは懈怠の心であり、惰弱の民風である。慎しむべきは勞働忌避であり、それに感染することである。

近來動もすれば農村の青年に勞働忌避の風あるのは如何にもなげかはしき限りである苦を避けて樂につかんとするのは人情の通弊であるかも知れないが、それに勝つのが克己である。

## 二 家 政

### ◇戸主と主婦

齊家の巧拙、賢愚、優劣は、家政の上にある。家政は男子よりも寧ろ女子の手腕によりて決せられ、經營の仕方によりて別せらるゝものである。それ故に此點に賢明である婦人は福の神と讃へられ、夫人は内助の君と唱へらる。之に反して、此點に拙劣低級の婦人は貧乏神と悪まれ、夫人は百年の餓飢を背負ひ込むだと覺悟すべしとせられて居る。

然し我國は戸主權が認められて居つて主婦の權利が認められて居らぬ、従つて一家統率の責務は戸主に在る。同時に妻を御し導き教へて、内助の功を上げしむるは、戸主の責任であるとする。而も我國の道徳は、妻に服従を強制して居り、従順なれと教へて居る。故に夫の命令に服するをよい夫人と心得、何事も従順にして居る妻女をよい女として居る以上は、家政に付て、戸主の責任の大なるは否定の出來ぬ事である。

### ◇男女と家政の擔任



然し男は外の仕事を擔任し、女は内の仕事に當るは、性格上の分擔であつて、各分擔に得意の技能を發揮するは、効果を上ぐる所以の道であり、能率増進の妙諦である。又た男子は粗大にして、女子は緻密といふも、男女の性格として、今も昔も異らぬ事であれば、其性格を利用して、各力を輸す事にするも亦賢明であるとする。性格自ら男女の仕事を區別し、責任を分つが故に、男は男らしく、女は女らしく働く事にすることがよいとする。

料理の名人は男であり、裁縫の好手も男子であり、物の鑑識も男子に上手があり、採美も亦男子に限ると云ふと雖も、而も多くの家庭では、炊事や料理や裁縫や、編物や、整理整頓は勿論日計は婦人の職務となつて居る。よく廢物を利用して、儉の功德を上げ、よく時を利用し無駄なからしむるは、婦人の手に待つものが甚だ多い。それ故に細心にして微物を棄てず、之を利用する婦人は、家政の神とされて居るのである。

#### ◇家政と婦人

名門の家が亂れ、秀才の人が失敗し、良吏と賞せられし人が失脚する裏面には、必ず思なる婦人があり罪の女が伏在する事は、新聞記事を見て居る丈けでも、枚舉に暇なき程である。之を制御し得ず、之を善導する能はざる男子に罪のあるは勿論なりと雖も茲に自覺せず、自重せず、自勵せざる女子も亦許すべからざるものである。

近時女子教育は開けたりと雖も未だ普及せざるの憾みがあり、特に開けたりと謂ふ所の女子教育は或は虚榮に驅られたり、或は形式に流れたり、或は時代の流行に上すべりするが多いのであつて、眞に婦人の性格に目醒めしめ、其の本務に自覺せしめ、其責任の大なるに悟らしむる事が出来ないのである。それ故に最高の教育を受けたる女子は、動もすれば職業婦人となりて、家庭の良妻たる能はず、高等女學校の卒業生が良家庭の嫁たるを嫌はれて、家庭の賢母となる能はざるの事實が、此處彼處に曝露されて居る。

#### ◇農村の家庭と婦人



農村に於ては、教育が女子に恵まれざるのと、經濟上の壓迫とによりて、中産及び無産の家庭に育ちたる女は、多くは工場に吸取られて仕舞ふ。中産及び有産の家庭の女は、中等學校以上に進むが、それ等の女は農家に稼す事を肯せぬものになる。斯くの如くして、今農村の青年は結婚難に陥つて居り、それが爲めに前途を悲觀して、田園退却を敢てするものあり、然らざるも快々乎として生氣なき日暮らしを餘儀なくさるゝもある。

地主の家庭に於ては、新らしく家庭を組織した夫婦は、田園の寂寞なる生活に堪へかねて、機會を求めて都市生活をせむとする。然らざれば、男子は都市に第二號を安置して、婦人をヒステリーに陥れむとするが多い。自作農は嫁を大事にせねば逃げられるとして、可成百姓をさせぬ、それを條件にして始めて嫁に往く事を承諾するもある。然らざれば、手腕技能を選ばずして、必要に迫られて結婚するが多い。小作農に至つては、多くは、必然的であり、本能的であるが故に、賢愚を選ぶ餘地はない勝

である。

農村には一藝に熟達した老農といふがある、それが爲め名を博するもの尠からずと雖も、而も老農は必ずしも齊家の人ではない、寧ろ家政に窮迫して情ない最後を見るが多い。それは妻女の家政に拙なるが爲めであり、内助の功に見るべきがなく、而して男子に之を善導し、教化する力なく、又た餘裕もないからである。

#### ◇農家の裏面

農家の家庭は眞に慘目であり、家政は見るに足るものが尠い。裁縫の出来ぬ女房もある、此等の家では古着屋の厄介になるが多い。然らざれば呉服屋に仕立を頼むで用を辨するのである、農家の支出は如斯して膨大する。料理に何の手腕も持たぬ、同じものを食はせらる。男子が料理屋に入りたる原因が此處に存するもの尠からずある、斯くの如くして、農家に無駄な費用がかゝる。整理が出来ず、整頓が出来ぬから、廣い家も狭く、新らしい家も汚く年中萬年床や萬年蚊張を見るさへある、斯くの如くし



て農家の生活は忌避さるゝ事になる。躰が出来ぬが爲めに、子供に皮膚病が多く、トラホームが流行して居る、それも其等女の髪が始末が出来ず、顔洗ふ事さへ癖つけられぬがある。まして記帳や日計をなすに於てをやである、實際算盤もなく、硯箱のない家が随分多いのである。

都市附近の農村は兎に角、多くの農村では、新聞を見る家は極めて少い、况んや雜誌、書籍に於てをやである。それ故に世の中の推移が分らず、世の中に順應する事は尙更出来ぬ。多くは傳統に制せられたり、因習に囚はれたり、舊慣に支配されて居るが多い。農家に於て、若い人達が、もたへ苦しむ事の多いのは、無理からぬ事であり農家の人が、無駄な時間、努力、費用をかけて損する事の多いのも、當然である。農家の困憊農村の疲弊、亦よりて来る事の偶然でない事が分るのである。

#### ◇齋家の上の悩み

男子は外出に機會があり、便宜も亦多い。それ故に時勢を知りそれに通ずる事も出

来るが、婦人に至つては、それは容易の事ではない。今日は團體旅行が流行して參宮や本願寺詣や、或は天理參りをするものもあるが、何が何にだか分らずに往復するが常である、且つそれは農村婦人の九牛の一毛にしか過ぎぬ事である。教育に恵まれず時勢に没交渉なる婦人を有する農家を齎めるは、蓋し至難な事である。斯くの如くして、現代に恵まれず、徒に消光する農家の生活は、誠に悲惨の極である。

山中唇日なしとの言葉は今も農村の多くに適用さるのである。人の交通が稀であるから、諺を聞いて真相が分らず、新聞も來ない、來ても舊聞であるから、其日の事が分らぬ。故に香氣な生活は人の壽命を延長するが事實であるならば、農村の人は尤も壽命に富む筈であるが、必ずしも然らざるを見れば、最村の惱の少からぬ事が分るのである。而も都市の遠近を論せず文化の高下を分たず、生活丈けは向上して往く、それは何處でも見逃がす事の出来ぬ事である。特に婦人のそれに對する感應は鋭敏である。それ故に婦人の衣服調度に上下の別なく、舊慣を脱した觀があり、化粧や化粧



の用意は、全く隔世の思がする其處に齊家上の新なる悩みが生じ農村生活の上に新たな累が及むで来たのである。

◇生活の改善（農村的結婚）

家政の上には種々の問題がある就中生活に關する事が尤も大切な問題であるとするは獨り吾輩のみではないと信ずる。

我國民の生活は民族固有のやり方に西洋のやり方が加はりて、或は二重、或は三重のやり方をやつて居る。それ故に生活に要する道具調度品の多い事は、他に類例がない所である。

衣食住は、どれもこれも、日本風と西洋風とが併用されて居る。何んとかせねばならぬ必要は痛感されて居るが、それが出来ぬで益々多様になりつゝある。改良せねばならぬと高唱されて居るが、そう云つて居る人が仲々改良をせぬで益々深みに引きづり込まれて行く、困つた事であり、情ない事である。

東京には官民の間に、生活改善會が出来、文部省の一室に事務所が置かれ、知名の人々で委員會が組織され、委員會では、衣食住に就て改善すべき事項が決定され、宣傳されて居るが、それを知つて居る人は極めて尠く、宣傳されて居る改良事項を實行する事は尙更少いのである。

◇農家困憊の主因

長い間、生活が極端に悲惨であつた農村は、凡る機會に生活の向上を考へ、それを實行する事に努めて居る。それが爲めに、近時農村の生活は著しく高まつて来た財政が窮乏し經濟がとれぬ様になるも無理からぬ事である。

市民は長い間の不景氣に惱まされた爲めか、或は賢明で早く自覺して来た爲めか、兎に角、馬鹿な事はせぬ事になり、無意義な事を避ける様になつて来たのは、何れの都市に於ても見る所がある。勿論其處には、農村に見る事の出来ぬ虚榮の徒があり、高襟連も居るが、それ等の風を見て市民を律する事は出来ぬのである。



低き生活に置かれた事が長かつただけ、それだけ農村には反撥的に生活向上を見る事が出来る。それに平等の主張が手傳ふて、市人に同せんとする負けぬ氣持もある、部市の不景氣で購買力が減じた埋め合はせを、農村の人でせんとする商人の商略に巧妙な點もありて、農村の衣食は常年に比すべからざるものがある。

生活の向上は、必ず家政經濟に影響して失費を多からしめ、支出を増加して經濟難に陥れねば止まぬものである、農家の困憊は其處から來るが多く、そこに經濟不如意の因がある。

特に農村の多くが、借金に苦しむ所以は、不時の天災地妖による損害の爲めなるを別として、多くは冠婚葬祭に無意義の舊慣に囚はれたり、つまらぬ虚榮に驅られて無駄な事を敢てする陋習によるのである。其弊を知つて矯正が出來ず、其害を辯へながら改善の出來ぬは全く舊來の陋習であり近來の虚榮である。

何處で聞いても、往つて見ても婚禮の爲めに無駄な事をしたり、無理をする事は、

特に甚だしくなる傾向のあるは、見逃がす事の出來ぬ事である。

◇農村の結婚の新レコード

愛知縣の農民は比較的伶俐であり、時勢に目醒めるも早いものが多い。農事の改良發達に對し家政方面にも他に範を示すものがある。特に近來、若い人達の間には農村的自覺の氣風を見るは、他に類例が少いとす、大正十五年三月七日に、幡豆郡三和村字小島の柵木家と碧海郡明治村の石川家との間に結び結ばれた婚禮の如きは、それを雄辯に證明するものであるとする。

柵木家は當主伴作氏で二十三代連綿として榮へつゝある舊家である、伴作氏は郡役所に勤めた事もある、村長をやつた事もあるが、農村の新傾向を見て、農業に生くる必要を認め、目下三町歩ばかりの自農作の人である。其息文雄君は西尾町の縣立蠶糸學校に入れて卒業させ、それを唯一の柱と頼むで居る、文雄君は若年ながら農業に生ん事の貴さを悟り、農村青年を卒ひて農村的の修養講學に怠りなひ男である。徴兵檢



査を了へ、家業は勢力不足をつげる程忙はしいので同君に嫁を貰ふ話が出て来たのは  
去年の暮れであつた。

親の義務として伴作君は嫁さがしをやつた、農業に生き得る嫁さがしは至難中の至  
難事であるが、四方に物色して、遂に碧海郡明治村の篤農家である石川實太郎氏の長  
女たね子を見附けた話は順調に進むで貰ふ、やらうと決定した。

#### ◇嫁入道具

結婚は人生の大事であるが故に有意義にせねばならぬ、それには双方とも農家であ  
り、農業に生きねばならぬ家柄であれば、何處までも農業に生きる様にするが先決問  
題であると、伴作氏父子は相談をし、石川家に申入れたのは

結婚式は百姓の労働姿でやりたい、故に紋付や其他の附属品は作らぬでよい、出来  
る事なら、柵木家では目下細なひ機械を入用として居る、又た嫁御の百姓道具一通  
りは持参して貰ひ度い出来る事なら能率増進のために自轉車にも乗つて貰ひ度いか

ら女乗の自轉車一臺は持参されたい、其他は一切無用に願ひ度い。

との事であつた、嫁をやる爲めに容易ならぬ心配をし、尙且つ調度品に手間暇をかけ  
ねばならず、其上に少なからぬ費用の支出を覺悟して居つた石川家は、それでよろし  
いとこの事なれば、當方に異存なしと答へたが、其處に七十八歳になる祖父があり、そ  
れにつれそう祖母もあるが、可愛孫娘を嫁にやるに、それは何たる事じやとの反對が  
あつた、然し、農家が農業に生きんとする形式は難有い事であり、特に労働尊重の覺  
悟を夫婦固めの時にするは尙貴い事である。それに今日の農村に無駄を取てし無駄な  
事をして、累を將來に残す弊があるから、それを矯正する一助ともなれば、兩家の結  
婚は極めて意義あるものになる由を説き、祖父母の快諾を得た。

祖父はそれならば、心からの祝をしてやらうと云つて、晝夜兼行で簀を三枚つくり  
祖母は四十足の鞋を作つて、それが嫁入道具調度品の中へ加へられたのは、涙の流る  
ゝほど床しい事である。



吾輩は、地方改良や民力涵養には、人一倍努力をして居り、農村振興には自治的自助的方法を説いて、今日は東奔西走して居るものである。出来る丈の事は實行し人にも實行の機会を與へ、其實行を助成する事に盡力もして居る。

吾輩が柵木家と石川家との縁組談を聞き、同時に奇麗さつぱりと陋習から超越して結婚法を探ると聞いた時には飛立つばかりの歡喜を覺へた。當時碧海郡の農事視察に來て居た東京日々の清水君、報知の篠原君、「家の光」及「農政研究」の主幹古瀬君にも直に其話をして喜むたのである。

心の底から祝福せねばならぬ氣になり、一氣呵成の筆を振つて、柵木文雄君に守の一卷を送つたがそれは次の通りである。

守

- 一、農國本の大義を忘れず耕耘にいそしむべき事
- 一、生命の生産は農業の特徴である事を悟りて糞水の勞を厭はざる事

- 一、勤儉治産以て國家社會に貢獻し得る素を養ふべき事
- 一、共同輯睦して平和の家庭を作り稼業の道にいそしむべき事
- 一、忍恕以て不平の種を除去すべき事
- 一、祖先の勤苦を思て懈怠の念を絶つべき事
- 一、各自分擔につとめて而も助け合ふべき事
- 一、小事を侮らざる事
- 一、信じて疑はぬ用意をすべき事
- 一、愛は人を生かし汗は己を活かすものと悟るべき事

紀元二千五百八十六年三月吉日

山崎我農生謹記

爲 柵 木 家

柵木家では意外の喜びで、それを式の時報告文に入れて讀み上げ、更に柵木家の新



家憲とする事にしたので我輩は亦大いに面目を上げた譯である。

結婚式の弊は、規律が立たぬこと、時間がかかること、無駄なことが多いこと、傳統に囚はれて居る事、であるが、今回の結婚式はそれ等の陋習を盡く打破した所に價値があり、面白味もあり、貴さがあるのである。

式の次第は左の通り時間割でやつた、

午後一時五十三分三江島着、仲人方に立寄り

同三時婿方へ着

一、佛前式典 午後三時より四時半

一、宴會 午後四時半より七時迄

一、食事 午後七時より八時まで

一、來客退散 午後八時より

#### 式の順序

一、一同着席 二、開會の辭

三、君が代奉唱

四、僧侶誓文奉讀(一同平伏)

五、戸主婚姻報告文奉讀(一同平伏)

六、三々九度の儀

七、親子盃の儀

此間青年希望働く身を繰返し合唱(村内青年により)

八、仲人の祝辭知人の祝電代讀

九、新郎新婦焼香

一〇、一同焼香

一一、婿の挨拶

一二、普回向(僧侶)



一三、閉會の辭

一四、一同起立柵木家彌榮の三唱

一五、順次退席

勿論此式は公開され、誰れが參列してもよいことにした。尙三々九度の杯に際し御酌人は、特に村内の模範青年に依頼したとのことである。

此式に婿は新調の農業労働服を着て鍬を持ちて席につき、嫁は田植姿の衣裳で鎌を手にして着席したことは、當初よりの計畫通りであつたのは、勿論のことである。

近親に現役將校の人あり、舉式の精神と形式とを書き添へ、式に參列方を軍隊に願出た所、軍隊でも非常に其精神趣旨に賛成し三日の休暇を許したとのこと其將校は終始式を指導したとのことであるが之亦珍らしいことである。

◇主義に生きる人達

同胞相愛、流汗鍛鍊、獻身報國の主義に生きつゝあるは、蓮沼門三氏の唱導により

て出来た修養團員である。全國の修養團員は、幾萬人あるかは不明であるが、眞劍の人であり眞劍の人であれば此主義に共鳴せねばならぬ筈のものである。

吾輩は、修養團の主義者であり現に愛知縣支部長をつとめて居るが、愛知縣では特に農村的の指導をすることに努めて居り、農民である以上、農業に生き得る訓練をやつて居る、それが爲めに、他の修養團員と或は違つた風習があり意氣があるかも知れぬ。

愛知縣の目醒めた農村青年は、修養團主義なる者が多い。彼等は飽くまでも、自活的にやり、自動的にやらんとして居る。それ故に漫りに官僚の力を頼まず、公共團體の援助をも待つまいと努める結果、講習會でも、講習會でも、彼等の力により計畫され、講師の選擇、會場の施設等皆彼等自身が共同してやるのである。

柵木父子は、それ等の會合に毎度出席し親は其やり方に共鳴し、子たる文雄君は暇さへあれば奉仕に来る人である。父子共に主義に生きる人達であることは、斯る新例



な結婚法によることになつた所以であるとする。

#### ◇家政の秘訣

世の中の進歩につれて家政學校も出來て來た、女子大學には家政科がある。今日の女子教育機關には皆家政に付ての教育をなし、訓練をなしつゝあるは結構なことである。

如何に家政が今日の大事であるかゞそれで知ることが出來、同時に家政は婦人の手に待つことが多いことも分るのである。それ故に良妻は、單に夫に親切なるばかりでなく、家政的の手腕がありて夫に心配をかけず、即ち内顧の憂なからしむるものでなければならぬのである。賢母は、單に子供の躾けがよいばかりでなく、子供をして時節柄必要な教育を受けしむる様、家庭に於て餘裕をつくる人であらねばならぬのである。

物價は容易に低下せず生活資料は殖へるばかりであり、それに向上の氣勢はそぐべ

からざるものであるから、生活費は高まるものと覺悟すべきであり支出は増加するものと心得べきである。それ故に消費節約は必要であり、儉約は出來る丈かせねばならぬが、それは無用、無駄、無意義をせぬことである。

冠婚葬祭に無用があり勝であり無駄なことがなし易く、無意義のことが多く、其處に舊來の陋習が認めらるゝ以上、如何なる方法でも、手段でも講究して以て、陋習の打破をせねばならぬが、今日の急務である。此際結婚の新レコードに共鳴して、無用無駄、無意義が排除さるゝならば、國家も國民も自助の道に立つことになるのである。家政方面を分擔するが婦人である以上、婦人が其處に自覺して、國家と民衆に貢獻することは偉大なものである。

婦人を虚榮の化身であるが如く考へ、女子は金喰いであると思ふは、世人の謬見偏視とすべきであるが、何事の上にも目醒めつゝある婦人、女子に對して吾輩は、斯る考と見方を世人になさしめぬ用意と努力とを力説するものである。



(因に云ふ 生活改善會では結婚費は年收三分の一以内にせよ、と決定し宣傳しつゝある。)

◇一の罪惡

民力涵養上地方に於て改良すべきことは冠婚葬祭の贅費を節することであり、生活改善上都鄙を分たず改善すべきことも亦それである。而も其弊を認めて居ながら改良が出来ず、其事に凡る方法手段を講じても改善の出来ぬ事は、冠婚葬祭の冗費節約である。

特に婚禮に於て其弊の甚だしきを見、其改良改善の容易からぬことを知るは、苟くも世事に通ずるもの、首肯する所であらうと信ずる。農村疲弊が叫ばれて居ても其改良が出来ず、農家の困憊が唱へられても其改善が出来ず、益々其弊の甚だしきを見、其愚の悲しむべきを指摘せねばならぬは、農村の婚禮に要する費用の過大なることである。費用の過大は單に、資本を窮乏に導くのみならず、勞力と時間と精神とを徒費

せしむることが多大であるのである。

今各國の結婚費比較(年收に對する結婚費の割合比較)を見るに

種別	英國	佛國	獨逸	米國	伊國	西露	日支
一年庭の千收	分八	割一	割一	割二	割四	割五	割八
二年庭の千收	割一	割一	割一	割二	割四	割五	割八

支那は嫁を買ふのであるから別として取扱はねばならぬ。やる貫ふといふ關係で結婚をする我國に於て、其費用が廿割や卅割近いといふのは全く沙汰の限りでありとする。知らぬ、分らぬが爲めならばいざ知らず、何人も其弊を知り、其愚を辨へて居ながら、尙且つ改良改善が出来ぬといふは、餘りに馬鹿げたことである。愚は罪惡なり



と云へば、結婚に無駄な費用をかけるは立派な罪惡である、それが爲めに無理算段をなし、首が廻らぬことになるは、天罰と觀すべきである。

◇行ふに道あり

近來地方によつては農事改良實行組合の内に社會部を設け、其處で冠婚葬祭の贅費を節する方法を講じつゝあるがある。所によつては矯風會を設けて、特に之れ等の弊風を矯正しつゝあるもある。或は村の規約で改良改善を勵行し、或は戸主會や婦人會の事業として之れを獎勵しつゝあるもある。

よく思はれ様、よく云はれ様よく見られ様、との虚榮の觀念は恐らく人間共通のものであらう。それ故に慣行を打破して悪く思はれたり、傳統を排斥して悪く云はれたり、因習を踐まずして悪く見られることは、何人も避けんと欲する所である。故に改良や改善は自他共に之をなすことにせねばならず、皆が一整に之を斷行することにならねばならぬのである。而も冠婚葬祭は、祭事は別であるが他は各人各所同時に行は

るべきものにあらず、時に數年、數ヶ月を隔る事があるため、動もすれば規約を作つた當時の意氣が抜けて仕舞たり、或は當時の中心人物がなくなつて、世話の焼き手がなくなり督勵するものがなくなる結果、行はれべき筈のことが行はれずなりやらねばならぬことがやれずなるは、世間往々見る所である。それ故に細密なる注意を要し、周到なる用意が出来ねばならぬとする。

知らざるは罪の初なり、とある蓋し至言である。とする故に世間を知らしめ、事情を明かにし、弊の甚だしきことの愚なるを悟らしむが、實行力養成の道なりとする。同時に比較的虚榮に走り易く、而も世事に疎き婦人に向つて此種の智識と理解とを授くるが肝要であるとする。

近時ひろき社會に於て、狭き家庭に於て、同様に婦人の勢力と地位とは著しく高つて來た。夫唱婦隨は昔の語り草となり、今は婦唱夫隨なるが多いのである。それ故に婦人をして悟らしめ、婦人をして努めしむるは、改良改善が敢行さるゝ所以なりと斷



する。

#### ◇婦人の特性

やさしいが婦人の特性である。而も最後に強い力を示すも亦婦人の特性である、つゝしみ深きも婦人の特性であるが、而もかけひきを敢てするも亦婦人の特性である、弱はくしく見るも、而も負けぬ氣に富むも婦人の特性である。

家庭に於て夫婦よく理解し合ひ、各其特性を以て助け合ひ、始めて家庭の能率を高め得る如く、社會の事業も亦男女の共力に待たねばならぬのである、今日に於ては公會に出席するものは男子が多く種々の公約をなすも男子である場合が多いのである。それ故に公會の内容は之を婦人に知らしめ、公約の全部は婦人に理解せしめねばならぬ、それが男子の務めであり責でもある。然らざれば、婦人の會を開催し、之を知らしめ、之を約せしめねばならぬのである。

婦人は男子の如く粗忽でない、横着でない、それ故に正直に守り行ひ、やりとうす

男子程ざつくばらんでなく、周章もせぬ、それ故に細かい所に氣がつき、微細を棄てない。男子ほど淡泊でなく、すて鉢になり難い、それ故に執着がつよく、根づよい。従來は餘りに婦人を見縊り、婦人を輕侮して居た爲めに、婦人の特性が發揮されず、伸長しなかつた觀がある。改良が遅々乎として進まず、改善が容易に行はざりしは、全く其處に歸因すとして可なりである。

家政に於て婦人の地位や重く、其任務や大なりといふ以上、益々婦人の特性を發揮し伸展出來る様になると同時に、社會の改良に於ても婦人の活動を望むのである。

#### ◇婦人の新らしい世界

個人の力は弱く、一家の仕事も小さいものである事が分り、協同の必要を認め、團體をつくる事の有利を辨へて來たのが現代人である。然し門外に出る機會の少き、社會の空氣に觸るゝ事の稀れなる家庭の婦人は、尙傳統に囚はるゝものが多く、其必要を知り、其有利なるを悟つても、之が實行の道に立ち能はざるものがある。今や農



事改良實行組合が普及し産業組合が流布せりといふと雖も、多くは男子の仕事と見られ、婦人に理解されぬ勝ちである。

街がかつた所では消費組合が設立され、之が流行するに至つたが之も男子の計畫、努力によるものが多いので、家政に改善をなすべく、婦人が率先其事に努むるものは宛ら曉天の星の如しである。

婦人に共同働作の内容が理解され、組合の機能が分つて、婦人がよく共同し、組合を利用する事が出来れば、恐らく一家の經濟、地方の經濟は、大に面目を新にする事が出来ると思ふ。

由來我國民の通弊は、生産に重きを置きて消費を輕んずる事であり、生産に工夫努力して消費を輕んずる事であり、生産に比較的無頓着である事である。經濟と財政とは、之れが國家的であらうと、私人的であらうと、團體の場合であらうと、消費を忽にしてよくなるものではないのである。公私の別なく、貧富の差

なく、一様に消費に無頓着なるは、我國が財政と經濟とが行きつまりとなる所以である。

何處の家でも、生活上の消費を指揮するものは婦人であり、家政の料理をするも婦人である。それ故に良妻は始末のよい、始末の出来る婦人であり、それは消費が上手である婦人であるのである。婦人が内助の功は、消費經濟の上に多く存すと見做すが常である。

始末よくする婦人を娶るは百年の豊年を迎へるが如く、始末の悪い婦人を娶るは百年の饑飢に遇ふと覺悟すべし、とあるは、古來の經驗が教へた鐵則である。それ故に婦人の新しい活動舞臺は、協同の力を利用する事であり、組合の機能を巧みにする事である。此點に於て男子の缺點を補ひ、短所を矯めるは、婦人が活動の一生面と心得べきである。其處に婦人の新なる世界があり、その世界は今正に婦人の前に開放されつゝあるのである。



◇時代の標語

時代の標語は消費節約であり、無駄をせぬ事、無意義な消費をせぬ事である。然し標語を百遍唱へても、千萬遍唱へても、念佛ほどの功能はないのである。

消費節約は實行事項であり、無駄をせず、無意義な消費をせぬ事は必行事項である之を唱へて實行せず、之を奨励して必行せぬが我國民の通弊であるとす。

すゝむるもの、自ら範を示さずして、徒に宣傳ビラの意匠に腐心す。すゝめらるゝもの、單に宣傳ビラの巧拙を批評して、之を實行せんとせぬ。徒勞の嘆、働き損の疲れ儲けのそしりを招くは、無理からぬ事である。

僕は敢て責任を婦人に轉嫁するものではない。又た敢て難を婦人に強制せんとするものでもない。然し男子の犯罪が多く婦人の虚榮に基因する社會現象を見、齊家に必ず始末よき、始末上手な婦人があるを知つて、婦人に敬意を表すると同時に、婦人の此點に自覺と努力とを切望するものである。

愛によりて導かれぬ男子はない、誠によつて動かされぬ男子もない夫婦の愛は至上であり、夫婦は誠によつて一身同體である。而も柔よく剛を制するは、婦人が男子に對する場合に多く見られるのであれば、僕は婦人の奮發を望まざるを得ぬのである。僕の家では、僕は収入の方面に勤め、僕の家内は支出の方面に儉して居る。それは恐らく、僕の家庭のみではあるまいと信ずる。家を大切に思ふ心は一つであり、國に盡さん心は一つである。祖先の勤功を思ひ子孫の幸福を思ふ心も亦一である。而も男女各分擔して、其責に任じ、其事に努むる所に、男女の別は嚴然として存す。之れ齊家の條件であり、齊家の方則であるとす。

◇消費の説

人生は消費であり、活動も亦消費である。それ故に世が開け、人が多くなればなるほど、消費が盛になり、消費の方面も亦殖へて来る、其處に時勢の進展があり、事業の擴張もあり、社會の發達もあるのである。それ故に消費は文明をはかる尺度であ



り、盛衰を示す目標でもある。

消費を有意義にするが文明であり、又た文化でもある。然るに今の文明人は動もすれば無用の費をなして憚らず、文化生活者は無意義な消費をなして恥ぢない弊がある。消費節約が喧傳され、儉約が奨励され、緊縮が高唱さる、敢て偶然ならんやである。然し角をためるはよいが爲めに牛を殺すは愚の極であり、毛をかるはよいが肉を削りて傷くるは痴の至りである。世の中には消費節約といへば、如何なる事にも消費してならぬと心得、儉約といへばなんでもつかはぬ事と思ひ、緊縮といへば手も足も出せぬとするが多い。それ故に、公共、公益、慈善の仕事までが行き詰りとする弊がある。これが、極端になると、袖から手も出さず、喉から痰も吐かず、遂に糞づまりとなりて、我から壽命を短縮するものさへ出来て来る。

白米は食はぬでもよいが、麥飯は喰はねばならず、絹の衣物は着ぬでもよいが木綿の衣物は着ねばならず、大廈高樓は餘計なものだが、休息の出来る家はなければならぬ

ず酒や煙草を休めてもよいが、營養になるものは攝政せねばならず、温泉や海水浴はどうでもよいが、汗した後の風呂は入らねばならず、物見遊山もそれで能率が高まるとあればやるがよいのである。何んでも小費多功が出来ればかけねばならぬ費用は吝しむべきでない、小費多功が分つて居れば、投資すべきは思切つてやる事が出来ねばならぬのである。一文惜しみの百知らず、寶の持腐れは、斷じてすべき事ではないのである。

行き詰りの世の中は打開せねばならぬ政府が、下手な手本を示し拙いやり方をして居る以上、國民は確つかりせねばならぬのである。それは一家の家政を巧みにし、個人經濟を上手にするに在る。しからざれば、國の現状を救ひ、我國家を泰山の安きに置く事は出来ないのである。治國は平天下の基であり、齋家は治國の因であるといふのは、古い言葉であるが、何時までも新らしい意義があるのである。

家を齊ふる上に於て、家政が主であり、それには婦人の功が大なりといふ以上、



は婦人の覺醒と努力とを切に希はざるを得ぬのである。徒に虚榮に走り、家をなす能はざる社交的の婦人のみが多くなるは婦人の地位を高め、婦人の權威を高むる所以でないとは斷ずる。

女の神で興されし我皇國、女の方で國威を海外に振ひし我日本國其處にはどうしても婦人の力が認められねばならず、婦人の能率が重きを置かれねばならぬとするげにや、婦人嫁して、お神さん、となる。始末よきお神さんは福の神であり、始末の悪い神は貧乏神である。國を救ふも神、國を亡ぼすも亦神、僕は福の神が、戸毎に家毎に存在します事を祈るものである。

#### ◇家政と三ほれ

貝原益軒先生であつたか、世の中は三ほれでなければならぬ、一には女房にほれ、二には業にほれ、三には土地にほれ、と云はれたとあるが、蓋し至言である。

#### 一、女房にほれ

家政をよくするには、何んと考へても、女房がよくなければならず、よい女房は容姿でなくて、心懸けがよく、萬事に氣がつき、手腕のある人であるは云ふまでもないことである。

年の若い間は兎角化粧上手な人がよかつたり、容姿のよい人がよい様に思ふが、それは性慾にかられる時代である。性慾に超越して、遠慮するものや性慾は性慾として更により大なる人の使命に目醒むる者は、誰れでも化粧に誤間化されたり、容姿で誘惑されはしないものである。

佐久間象山先生は容姿のよいものは心がけもよい、又たよい子を生むものであるから、女房は出来る丈け奇麗な婦人を選むべし、と主張されてそれを實行した人であるが、然し先生の主張は裏切られたことを遺憾とする。世の中には奇麗な妻君を持ちて喜び、美貌は衆目を引く様な婦人を妻君として得意がつて居るがある。然しそれ等の多くは、喜悅を永遠に得るものなく、長く得意の地位を得ることが出来ないのが、社



會上の事實である。

男にも智勇兼備の人があり、文武兩道に達した人もあるから、女でも美貌と品性とを兼ね具へるもあり、容姿と手腕とを具備するもあるが、それ等は少數であるが、世界共通の事實である。故に化粧上手な人を大事にし、容姿の美なるよりも心がけの美はしきを大切に、美貌の誇りよりも責務を果たすことに忠實なる人にはほれるが男子の心得でめらねばならぬとする。

農家でも、商家でも、役人でも、軍人でも、夫婦和した所に齋家の事績を見ることが出来、妻君の人格を尊び、妻君の手腕に信頼し、女房の親切に慰められる男は、活動し、精勵し、努力し、事功を上げるものである。俸給取なら、俸給を受け取つた日に直ぐ妻君に渡し得る人は、間違いの少いものである。家政にぼろを出さずに済む人である。農家でも商家でも、収入した金の始末を妻君にさせる人は、馬鹿な遊びをしたり馬鹿を見ずに済むものである。それ故に或る所では亭主が死んで後家になつた家

は復興する、持ち直ほすと云つて居る、それほどに妻君は内助の柱であり、夫を取締る役目の人であり、亭主を精勵させるものであり、家庭を平和にし家族を安定せしむる人である。それ故に主人にはほられる婦人は偉い人であり、又た婦人としては幸福の人である。斯る偉い婦人には男子がほれる。ほれるほどの婦人を持つた男子は亦幸福であるは云ふまでもないことである。それ故に、女房にほれと云ふのは齊家上最も大切なことであり賢明な教訓であるとする。

## 二、業にほれ

業にほれよと云ふは、自己の職業を理解し、自己の業務に權威を認め、自己の仕事に誇りを感じ喜んで勤め、安んじて勵み、感謝して働く様にせよ、といふのである。農家でも、商家でも、役人でも、軍人でも、労働者でも、自己の職業にはれてやつて居る人は、時間の方で熟練が出来、趣味が自ら出て來、得失、利不利に超越してやれることになる。斯くなれば、願はずして報ひられ、求めずして恵まれ、期待せぬも



のが與へられることになるものである。

近來の面白からざる現象は、農村の人にして農業に生すべき人が農業を信せず、農業に執着する能はず、農業に安定する能はざることである。或は農村疲弊の聲に脅かされたり、農家困憊の叫に脅されたりして、農業にいや氣をさざすといふことは、全く業にほれて居ない證據である。農村の疲弊も農家の困憊も、其原因は種々あるが、其主なる原因は全く農業に農民がほれない結果と認めざるが正當とする。それ故に、農村の疲弊を除却するも、農家の困憊より超越するも、農民が農業にはれる様にすることに限るとする。

農業にほれて仕舞へば、引き合はぬければ、どうでも引き合ふ様に工夫もする。儲からぬならば、儲かる方法を研究せねば止まぬことになる。故に農業の經營に自ら目醒めねばならぬことになり、農業經營の改善に到達が出来ることになる。すれば、農業では如何にするなら行き立つか、如何やれば立派にやつてゆけるかの道が明瞭になる。

る。

農業にほれて農業にいそしむ人は、自然に經營の秘訣を悟ることも出来、秘訣を實行することが出来る。それが出来れば、農村の疲弊も、農家の困憊も自ら免れることが出来るのである。それ故に、業にほれ、と説けるは、如何なる業務者でも、業務によつて立身齊家を心懸ける者の忘れてならぬ教訓であるとする。

### 三、土地にほれ

土地にほれ、と云ふのは、土地を根據として人は働くものであり、土地に安住するものである以上、土地に親しみ、土地に愛着し、土地が戀しくならねばならぬとのことである。

土地にほれるには、土地の人によくならねばならぬ。それには、土地の人と親交し土地の事に盡力し、土地の人より認められねばならぬものである。特に地に親まねば仕事の出来ぬ農業に於ては、何よりも土地にほれねばならぬとする。然るに、或は土



地が不便であるとか、或は土地が瘦せて居るとか、或は土地の人情が氣に入らぬとか云つて、土地に難癖をつけるものゝあるは、情ないことである。不便な所は努力によつて便利にすることも出来る、瘦せた所も肥培を丁寧にすれば沃土になり、人情も悪ければ淳厚にすることが出来る。それは、土地にほれて始めて出来ることである。昔から、住めば都、といふ諺があるが土地にほれさへすれば、そうなるが人情であるとする。

郷里を愛する心、郷土に執着する心は、土地にほれることである然し過ぎたるは及ばざるが如し、とあるが、之は土地にほれる上に於て痛感さるゝが今日の狀勢である人口増加の激しき今日は、内地植民や外國移民が大切であるのに、それが振はぬのは餘りに土地にほれ過ぎる結果であるとする。それ故に、此點に於ては、新らしい考慮が必要であり、新なる覺悟が大切であるとする。

兎に角、土地に落付くには齊家が根本であり、土地に愛着することが出来るのも齊

家の結果である家資分産すれば、慣れた土地に居れぬことになる。家運が傾けば、土地に居悪くもなることになる。それ故に土地にほれるは大切であり、土地にほれることにはなるは大事である、而もそれは齊家であり齊家によりて出来ることを思はねばならぬのである。

繰りかへして云ふ、齊家には、一に女房にほれ、二に業にほれ、三に土地にほれ、と古人が教へたことは、實に貴いことであり、則るべきことであるとする。換言すれば、家政をよくして餘す所を多くし、家業に巧みにして得る所を多くし、土地に安定が出来る家をつくることによりて人は福利を得國家の基礎が固まるのである。

#### ◇家政の意義

人生の脅威は生活の不安であり、不自由である。生活に比較的心配がなく、不自由がなければ、人生は面白くもあり、愉快でもある。従つて其處に、色々の考慮が必要となり、工夫が肝要となり、努力が大切となる。一家に於て、それ等は家政の方面で



あるとする。

生活に巧拙があり、上手下手があり、進退がある。富めるもの必ずしも面白い生活が出来たものでなく、貧しきもの必ずしも不愉快な生活をせねばならぬものではない。又た貴きもの必ず高尚なる生活をなし、賤しきもの必ず下劣な生活をせねばならぬものでもない。それは一に家政の巧拙により、上手下手に基き、賢愚によりて出来るものである。

故に人生に目醒め生活意識が明かになればなるほど、よりよき人生を迎へ、より進むだ生活を欲するは、當然のことである。それ故に「家政に自覺し、家政に向上を期するは、文明人の常であり、文化人の面目であるとする。之れ今日、家政が一の學問となり、科學にもなつて來た所以である。

圓滿にして面白い家庭をつくるも、明るい愉快な生活をするも、家政の如何によりて制せらるゝ場合が多い。義理人情を辨へて、隣保團結の美風を保全し、社會公共に

つくす奉仕的の生活をなすも亦家政が行届くことに因る。それ故に、賢き家政は、自他を幸にし、進むだ家政は、公私を福とするものである。

生活様式が著しく變はりつゝある今日、生活の向上に憧憬することの急なる現代に於て、家政は愈々齊家にとりて重大となりつゝあり、必要となつて來た。故に家政の研究家政の工夫は、家を成すもの、家を有つもの、家を榮へしむる者に於ては、何ものよりも本氣にならなくてはならぬことであるとする。これ、僕が業の經濟に専らにして、家政を等閑に附する今日の經濟學を排斥する所以であり、自己の力をはからずして而も、曩に農家の經濟を公にしたる所以でもある。

#### ◇家政の主

諺に、不始末な女房を娶つたものは、百年の饑飢に遭ふたと覺悟せよ、始末よき女房を持つたものは百年の豊年を迎へたと思へ、とあるは、蓋し至言である。之れ、家の盛衰消長に、婦人の位置と力量とが、如何に大切であるかを云顯はしたものである。



全く、家政の主は婦人であり、女房であり。妻君である。古より女房を目して内助の人となす、蓋し其意味である。

子孫をよくし、よい子孫を得んには良妻よりも寧ろ賢母でなければならず、家政をよくし家政に手腕を見るには賢母よりも良妻でなければならぬのである。齊家には、一面よい子孫を得ねばならず、よい家政を得ねばならぬ故に、齊家には良妻賢母が必要である。故に女子の教育方針は、齊家の立場よりすれば、良妻賢母でなければならぬとする、又た家を大切にせんと欲せば、肩書よりも、容貌よりも、交際よりも、財産よりも良妻賢母たり得る婦人を娶るが男子の心得であらねばならぬとする。

岐阜縣の青年にして、成名齊家にいそしむだものがある、年頃になりて迎妻の必要を認めた時申分のない一婦人を紹介された、見合の時、婦人の脚に猫が戯れかゝるを足にてつけたのを見て、其男は斷はつた。知己友人は、何故に斯る立派な婦人を斷はつたかと問ふた所、其男の曰くには、あの女は全く立派な女である。然し猫を足で

ける様なことでは、動物に對する愛がないことが分る、それでは動物を飼育せねばならぬ農家の良妻たる資格はない、故に斷はつた。と。其後、此男は容貌風采は彼に遠く及ばざる婦人を娶つたが、今日良妻で賢母である喜びを得て居るといふが、面白いことである。斯る周到なる用意は、齊家の人になければならぬとする。

#### ◇家政の要道 (其一)

家政の要道は生活を合理にし、面白くし、向上することに在る。精神的に云へば、我を去り、私を去り、以て睦み合ひ、助け合ひ、慰め合ひ、補足し合ふことによりて夫婦の協調が出来ねばならぬ。物質的に云へば、衣食住のことに研究工夫をして、無駄を避け贅澤を斥け質素儉約が守られねばならぬとする。

慈悲の心あり、虚榮に驅られぬ覺悟があれば、怒に遠かり煩悶より免かるゝことが出来る。衣食住を健康第一に調度按配するを得ば、疾病に超越することが出来る。此邊に對して、男子の理解は勿論大切であるが、婦人の覺悟は更に大切であるのである。